入来院家所蔵平氏系図について（下）

山口　隼正

On the Genealogy of the Taira Clan owned by the Irikiin Family (Part 2)

Takamasa YAMAGUCHI

入来院家所蔵の系図「五番」について、前回（上）ではそのオモテ（表面）部分を考察したが（長崎大学教育学部『社会科学論叢』六〇号、二〇〇二年三月）、今回（下）はウラ（裏面）部分を考察し、その全文を紹介しよう。

先ずウラ部分の構成だが、はじめに坂上田村麻呂をめぐる伝承記事があり、ついで執権家北条氏の各流についての詳細な系図（草案）である。ここで田村麻呂の伝承記事があるのは唐突な感がするが（注1）、これはオモテからの連続で同筆である。ついで北条氏の系図（草案）だが、これも同筆だといえる（後掲の［図1］［図2］参照）。要するに入来院家所蔵の系図「五番」は、諸次第（オモテ）、平氏系図（オモテ）、坂上田村麻呂伝承記事（オモテ～ウラ）、北条氏系図草案（ウラ）の順に配列されている。この系図「五番」は、一見するに、オモテ部分は肉太で清書的な書体（太字）、ウラ部分は細く割と無造作な筆者自身（能筆）の書体（細字）であり、オモテとウラとでは筆跡が別（別筆）のようにも思える。しかしオモテ～ウラの接点の坂上田村麻呂伝承記事は、明らかに同筆であり、あらためてオモテ（平氏系図）における北条氏部分とウラ（北条氏系図草案）における対応部分とを比較するに（特に［図2］と［図7］とを対比）、同筆だと判断できるので、この系図「五番」はオモテ～ウラ全体、同筆だといえよう。そして書風からすれば、そう下ったものではなく、当時、鎌倉末期―十四世紀前半のものと見てもよかろう。

この北条氏の系図（草案）は、各流（名越、極楽寺、常葉、金沢、嫡流、時房流、大仏など）ごとに独立させた系図であり、北条氏として全体をつないだものではない。オモテの平氏系図（太字）とは違って、細字で書かれており、また一紙の中で、上下で別々な系図を載せた箇所もいくつかある。「料紙」節約のためだといえる。冒頭の「名越」流系図で、「朝時」の右横に「奥書之料紙不足之間上下付、以正文可見合」とある。「料紙」の残り（余白）が「不足」するかもしれないので上下を付けて（詰めて）書いたこと、「正文」によって照合すべきことが注記されている。この系図草案にはさらに典拠たる「正文」（オリジナル）―情報源が存在したのであり、「正文」は鎌倉末期の幕府―北条氏関係者によって作成され、それを間もなく薩摩渋谷氏（もともと相模国御家人）の一員が閲覧の機会を得て、関東―鎌倉あたりで能筆一人（例えば武家方右筆）に筆写させ、この系図草案がなったと想定しよう。そして入来院家（薩摩渋谷氏の中心的存在）に相伝されたのである。入来院家本『北条氏系図』と称しておこう。

この北条氏系図（草案）は、他の諸系図に収録される北条氏系図（注2）と比較対照、点検してみるに、何しろ女性の記事―しかも具体的に配偶者（嫁ぎ先）を記した場合が極めて多く、また特に名越流（朝時～）、金沢流（実泰～、後掲の系図ⓐ）、大仏流（後掲の系図ⓓ・ⓔ）が詳細であるといえる。これらについては、他の諸系図では一向に見かけない場合（人名など）が多い。

同じ系図「五番」だが、オモテにおける北条氏の部分と比較対照するに、オモテの記事はこのウラの要約だといえ（人名など省略箇所が多い）、特に女性については然りで、ウラは詳細で多く見えるが、オモテではそのうち極めて僅かしか記されていない。総じて、オモテの記事（人名など）でウラに見えない場合はない。

この北条氏系図草案（系図「五番」ウラ）と、系図「弐番」②―「四番」とを比較対照してみよう。先ず系図「弐番」②と「四番」の接点（紙継目）は、内容的にいって、この系図「五番」ウラにおいては始めの「名越」流の時長・時幸兄弟（朝時の子息）の間にある。念のため、その旨、後掲の系図の上欄に示した（四頁上欄）。従って系図「五番」ウラ部分を書写（転写）したものが、概ね系図「四番」だといえる。両者を対照、点検してみるに、「四番」には、書写に際して人名・注記について省略・脱落・誤写などが多々見られる。何といっても最も大きな違いは、この「五番」ウラ（北条氏系図草案）は「料紙」節約のため上下二段に示した場合があるが、「四番」ではその下段の系図を丸ごと省略（不採用）した場合が見られることである（後掲の系図ⓐ～ⓕ）。そして、この「五番」ウラの末尾には奥書など見えないが、「四番」の末尾には奥書「宝徳二年庚申三月吉日　重梁書之」がある（書写奥書。後掲の［図6］参照）。

この系図「五番」ウラ（北条氏系図草案）は、極めて詳細で、作成～成立時期も古く、とにかく珍重な古系図だといえる。北条氏系図の起点（原初形態）に近いのかもしれない。入来院家が相伝して来た史料については、いわゆる古文書（入来院家文書、『入来文書』の中核。補注2参照）のみならず、この系図「五番」などを加えれば、あらためてその価値の大きさを認識できよう。

＊　　＊　　＊

ここで、この系図「五番」ウラの本文を全文翻刻、紹介しよう。つぎのことを了承いただきたい。

○この系図には、紙面に上下二段―別々の系図を提示した場合が見られる。このような場合、特に下段の系図については、系図「四番」に殆ど採用（収録）されていず、また印刷に際して煩雑になるので（特に［図3］［図4］参照）、便宜上、後ろに回して提示した（後掲、系図ⓐ～ⓖ）。

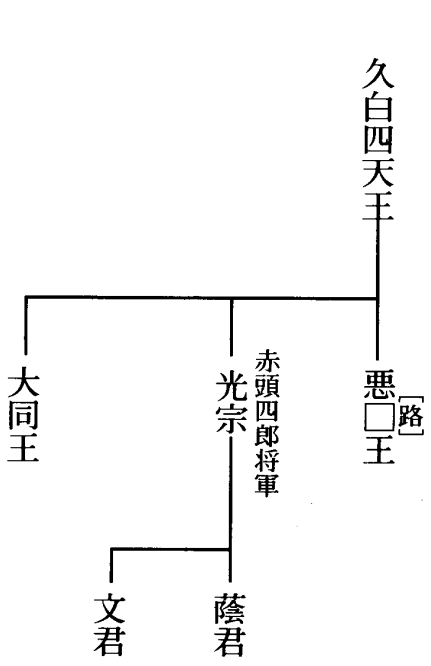
○紙継目は、上欄に点線と算用数字で示した。オモテとは逆で、(9)(8)～(1)の順となる。念のため、系図「弐番」②―「四番」の接点（紙継目）の位置も示した。

○前回（上）の場合と同様、挿入符や抹消符は用いなかった。印刷上、煩雑になるからである。後掲［図4］など参照。

○この系図「五番」ウラについて、「五番」オモテの北条氏部分とか、他の諸系図に収録される北条氏系図（注2に示した六種の系図）と対照、点検したところ、これら何れの系図にも見えない者（人名）がかなりあり、記事内容（人名、注記など）も的確であった。何しろ北条氏プロパーの系図草案である。

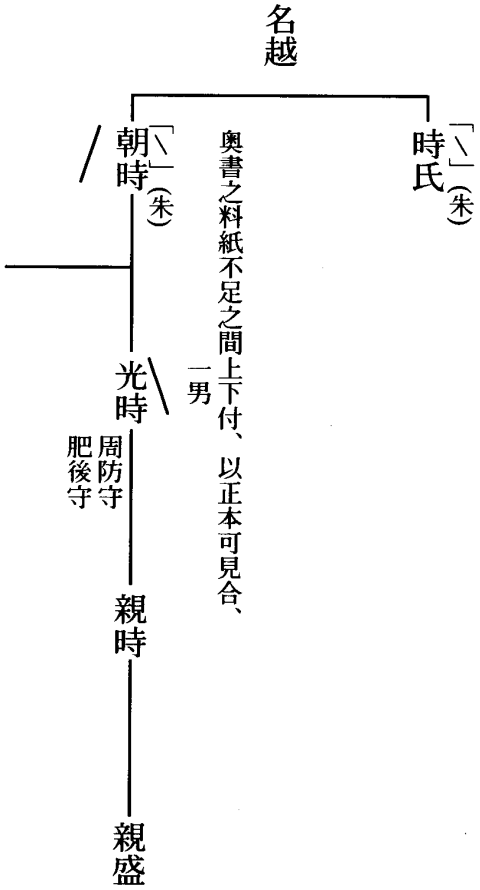
（以下、ウラ）

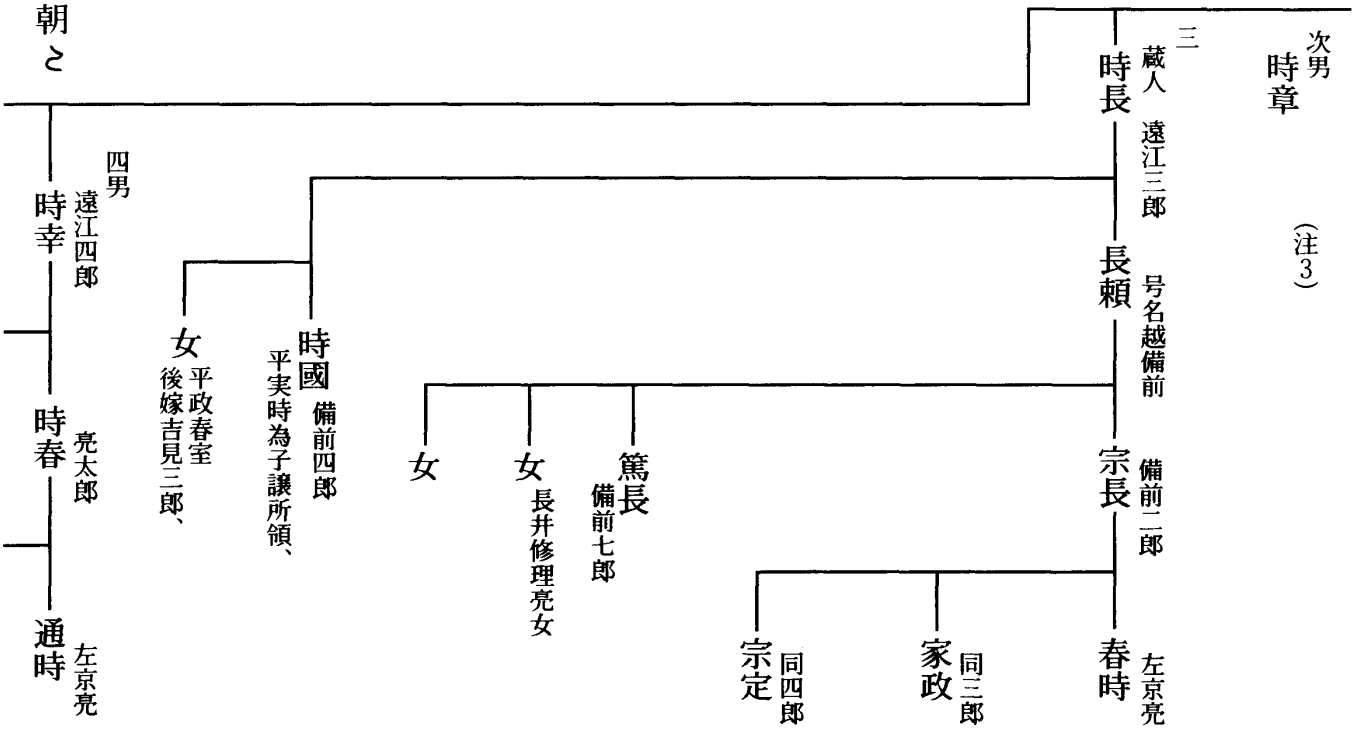
赤頭四郎将軍光宗先祖者久白四天王

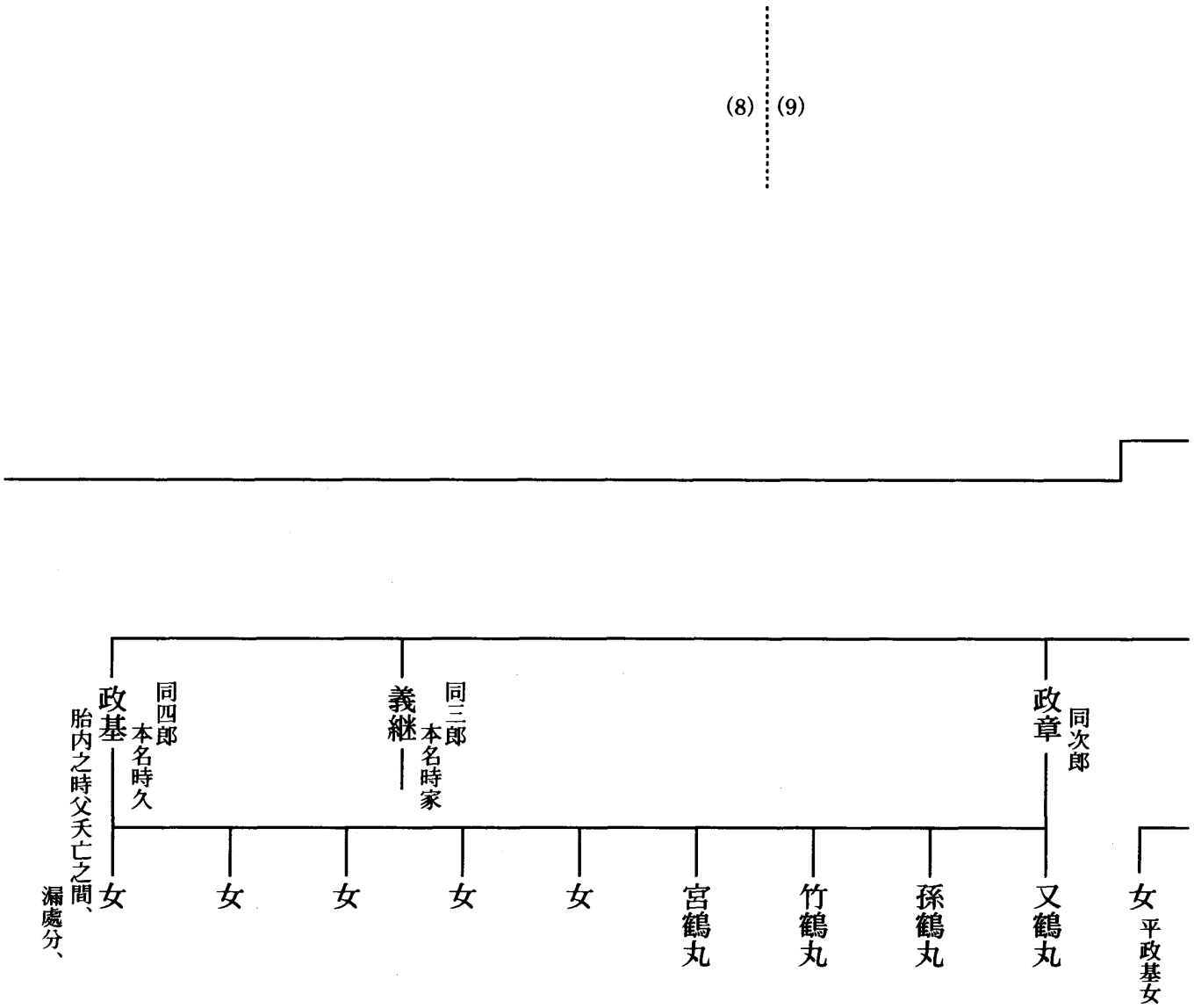


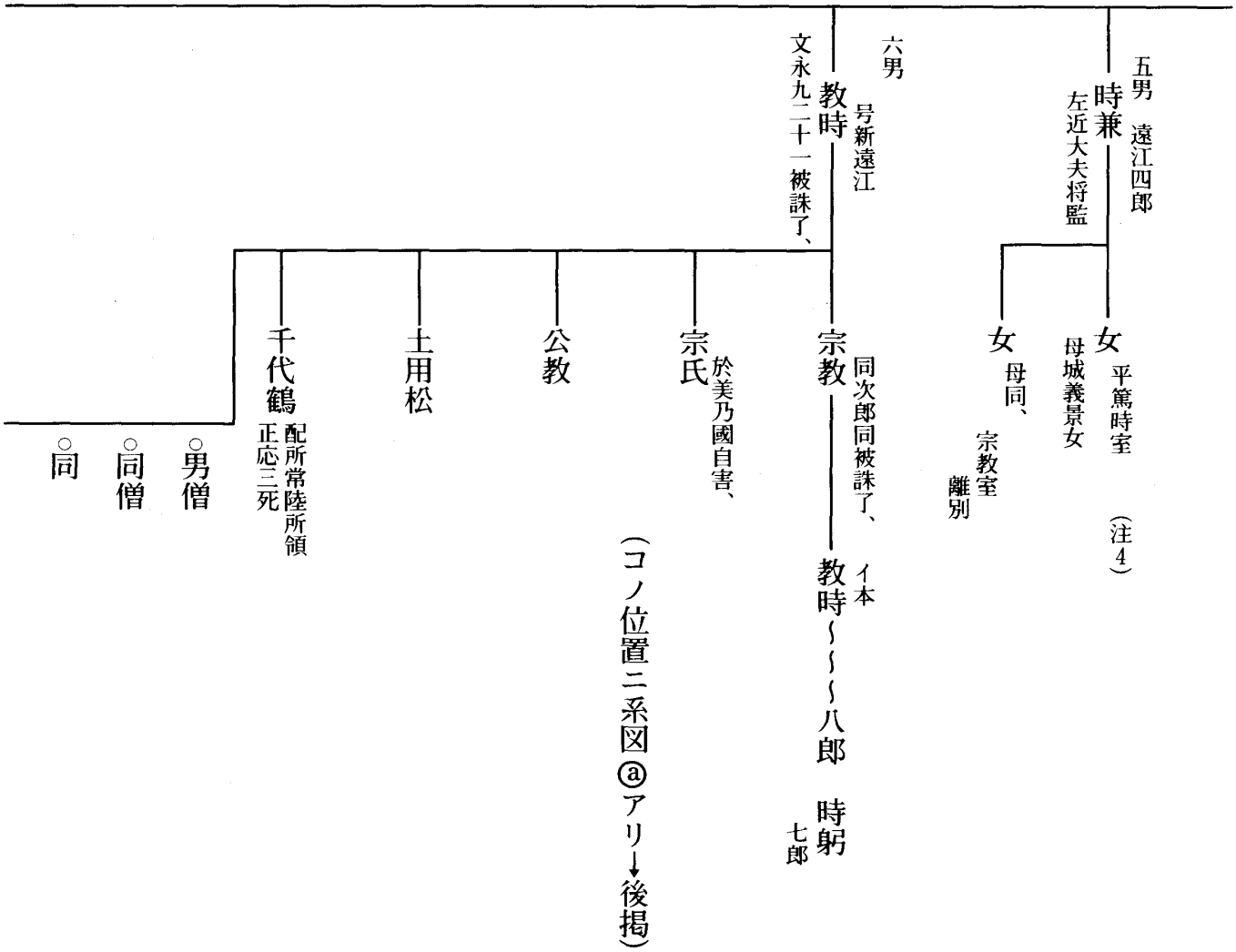
東夷千嶋大王ヲノマノ次郎云々、

堺河次郎貞任　　島海三郎宗任 此人等被誅戮了、

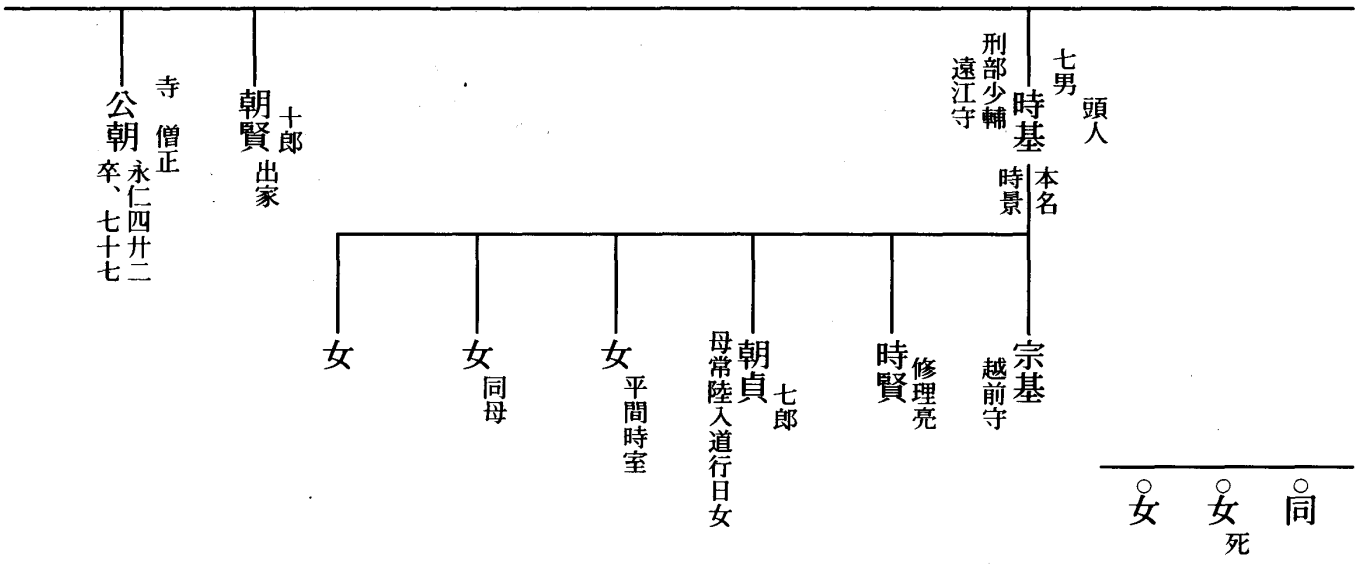


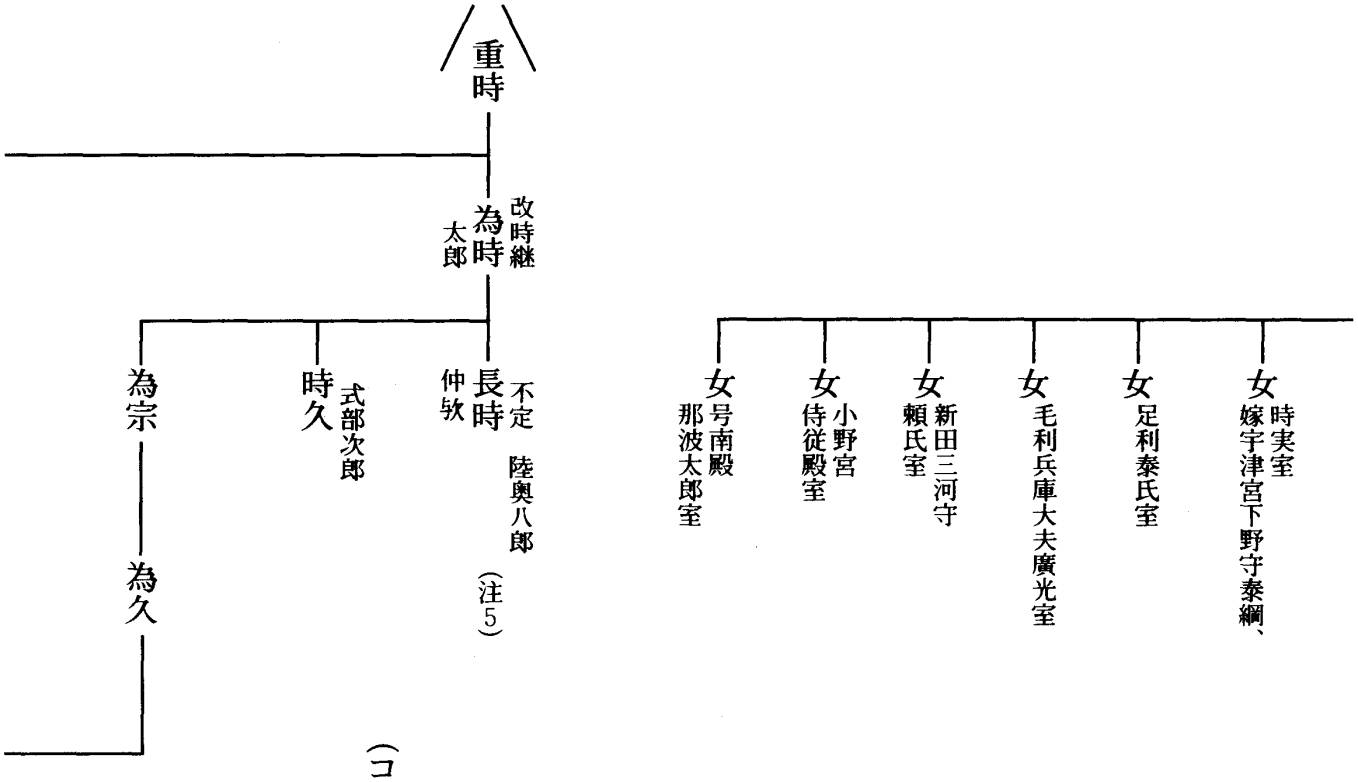

（弐番②）
（四番）
朝之
次男
時章
（注3）
三
時長
蔵人
遠江三郎
長頼
号名越備前
宗長
備前二郎
春時
左京亮
家政
同三郎
宗定
同四郎
女
女
長井修理亮女
篤長
備前七郎
時國
備前四郎
平実時為子譲所領、
女
平政春室
後嫁吉見三郎、
四男
時幸
遠江四郎
時春
亮太郎
通時
左京亮


(8)
(9)
政基
同四郎
本名時久
胎内之時父夭亡之間、
漏處分、
義継
同三郎
本名時家
政章
同次郎
女
女
女
女
女
宮鶴丸
竹鶴丸
孫鶴丸
又鶴丸
女
平政基女

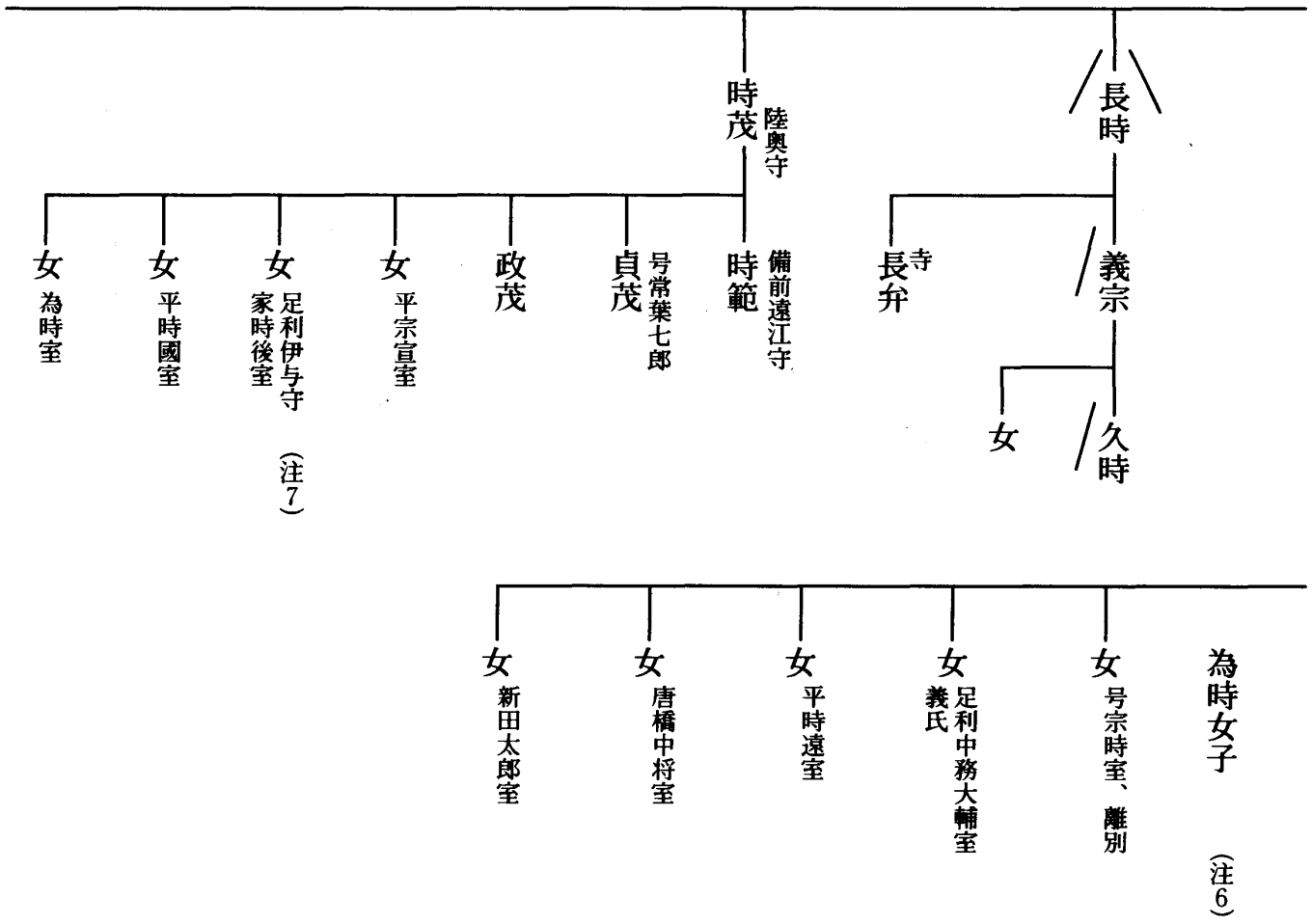

五男　遠江四郎
時兼
左近大夫将監
女　平篤時室　（注4）
母城義景女
女　母同、
宗教室
離別
六男
号新遠江
教時
文永九二十一被誅了、
宗教
同次郎同被誅了、
イ本
教時～～～八郎　時躬
七郎
宗氏
於美乃國自害、
公教
土用松
千代鶴
配所常陸所領
正応三死
○男僧
○同僧
○同
（コノ位置ニ系図ⓐアリ→後掲）

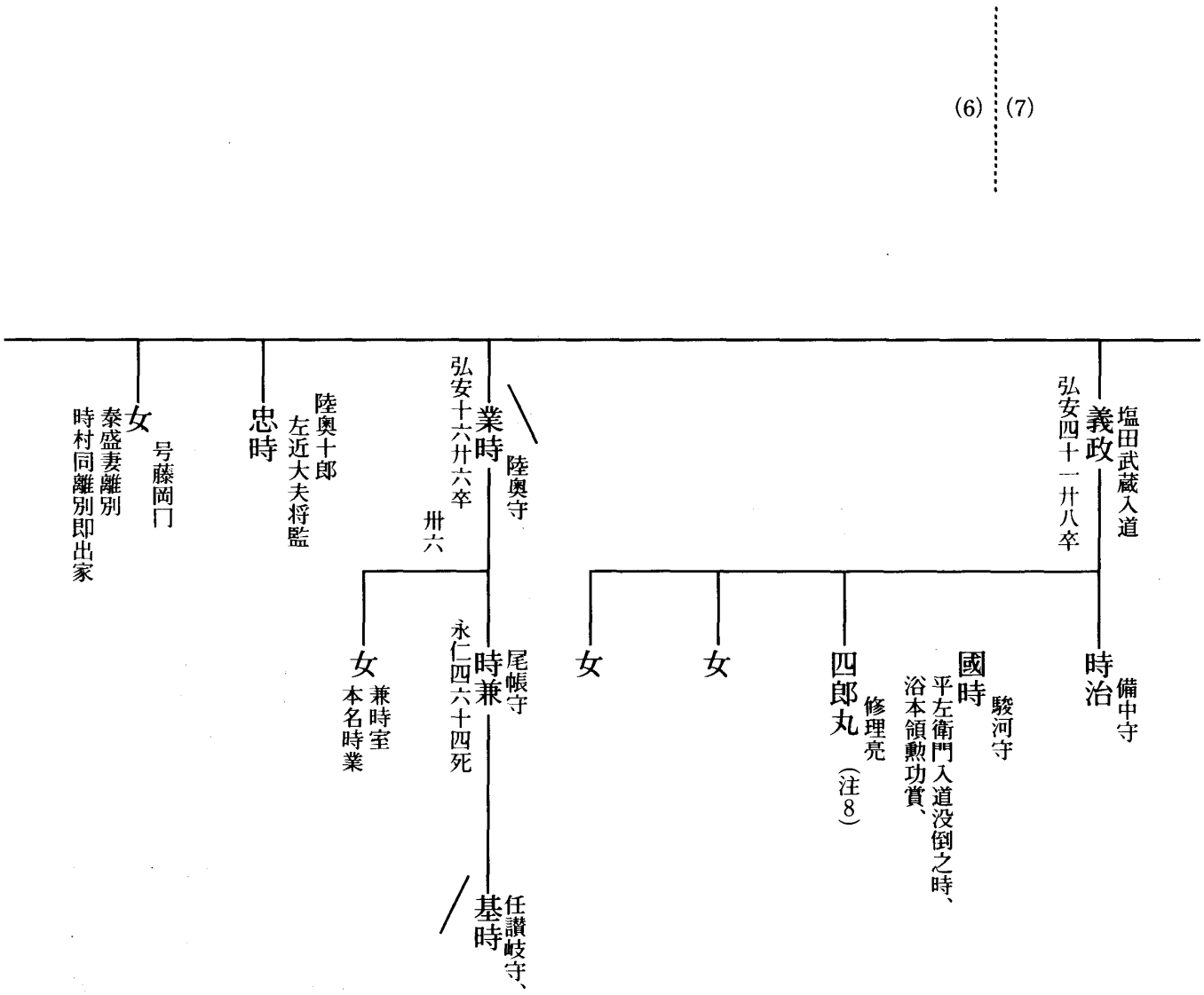
(7) (8)

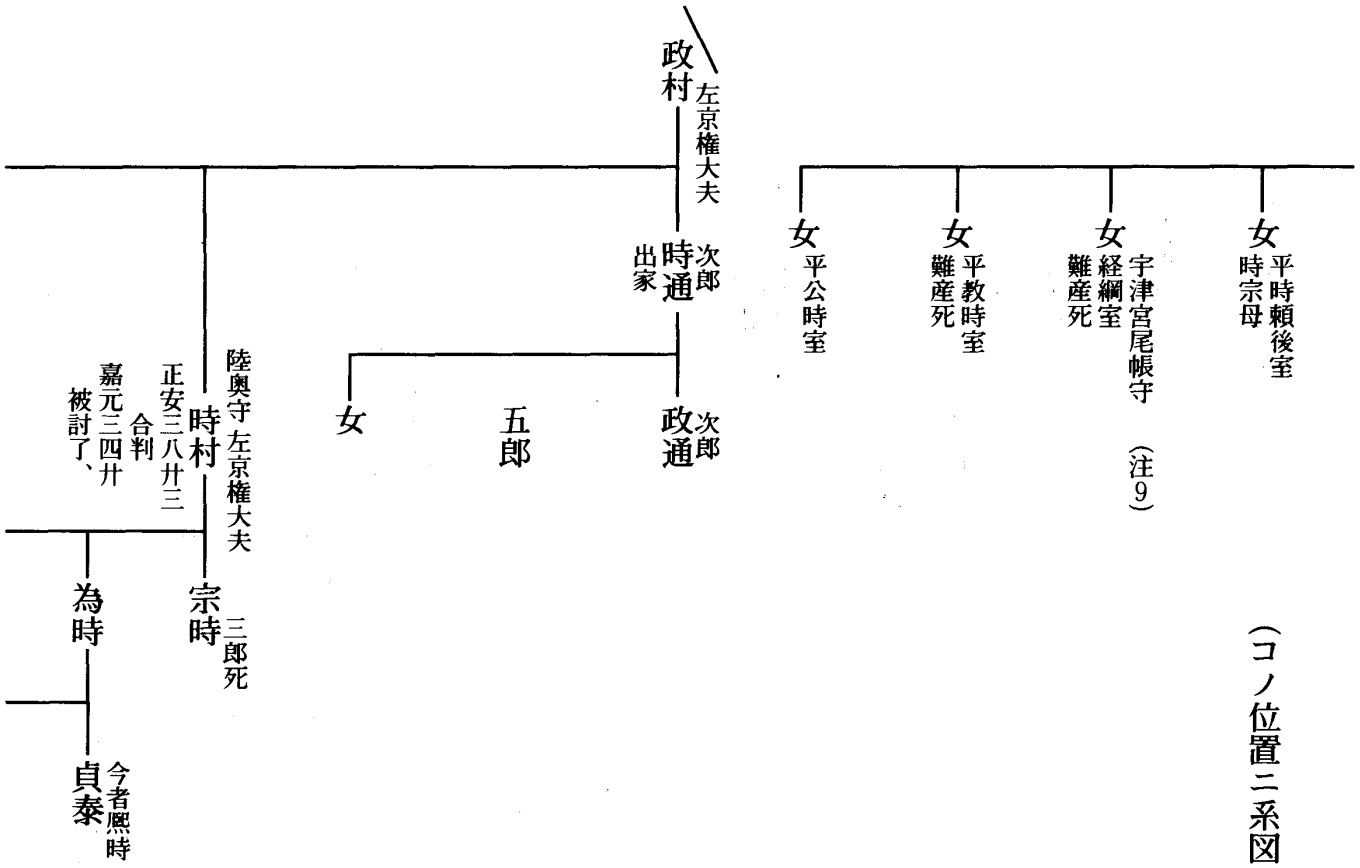

寺 僧正
公朝 永仁四廿二 卒、七十七
朝賢 十郎 出家
刑部少輔 遠江守
七男 頭人
時基 本名 時景
女
女 同母
女 平間時室
朝貞 七郎 母常陸入道行日女
時賢 修理亮
宗基 越前守
○女
○女 死
○同



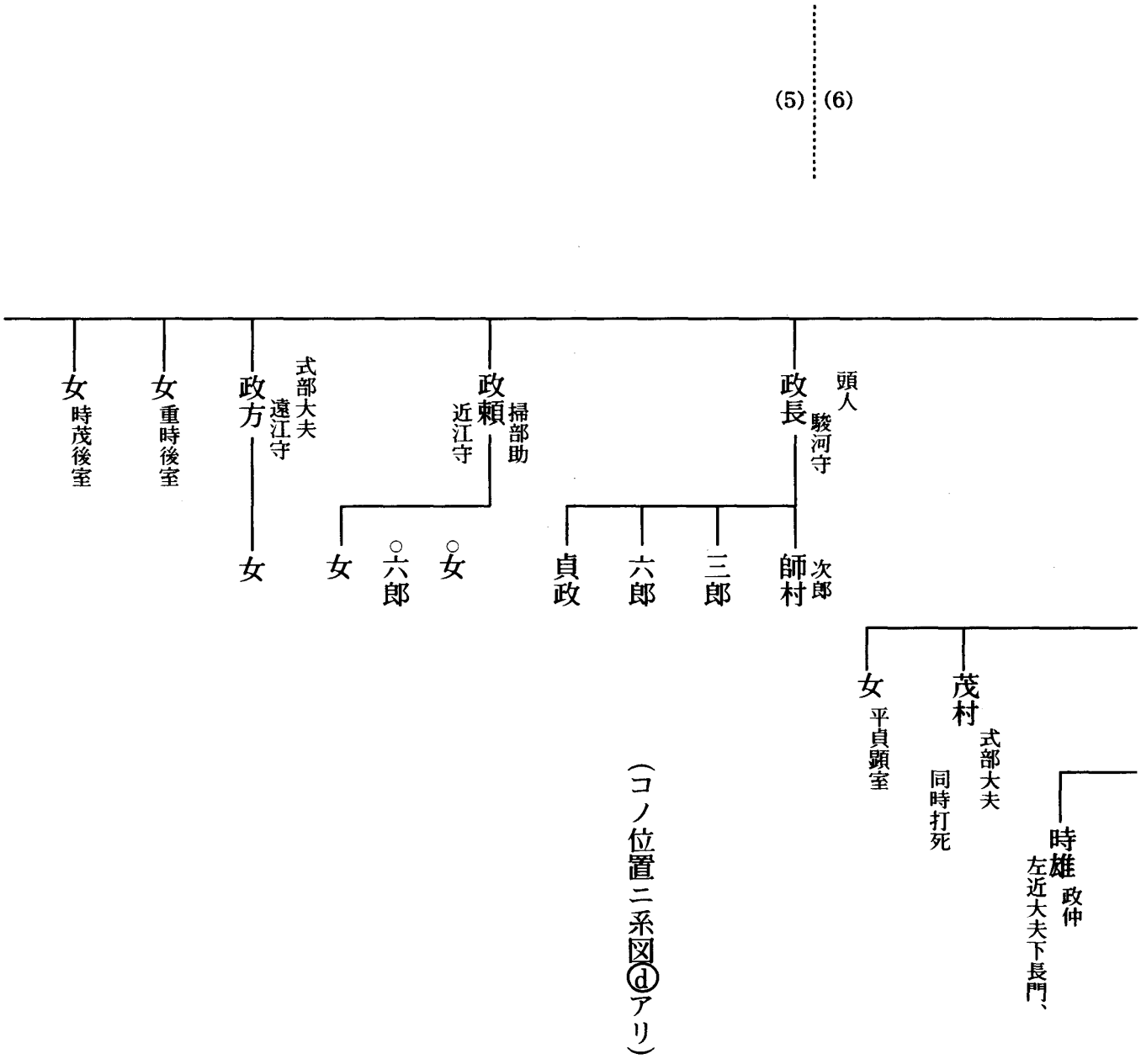
（コノ位置ニ系図ⓑアリ→後掲）

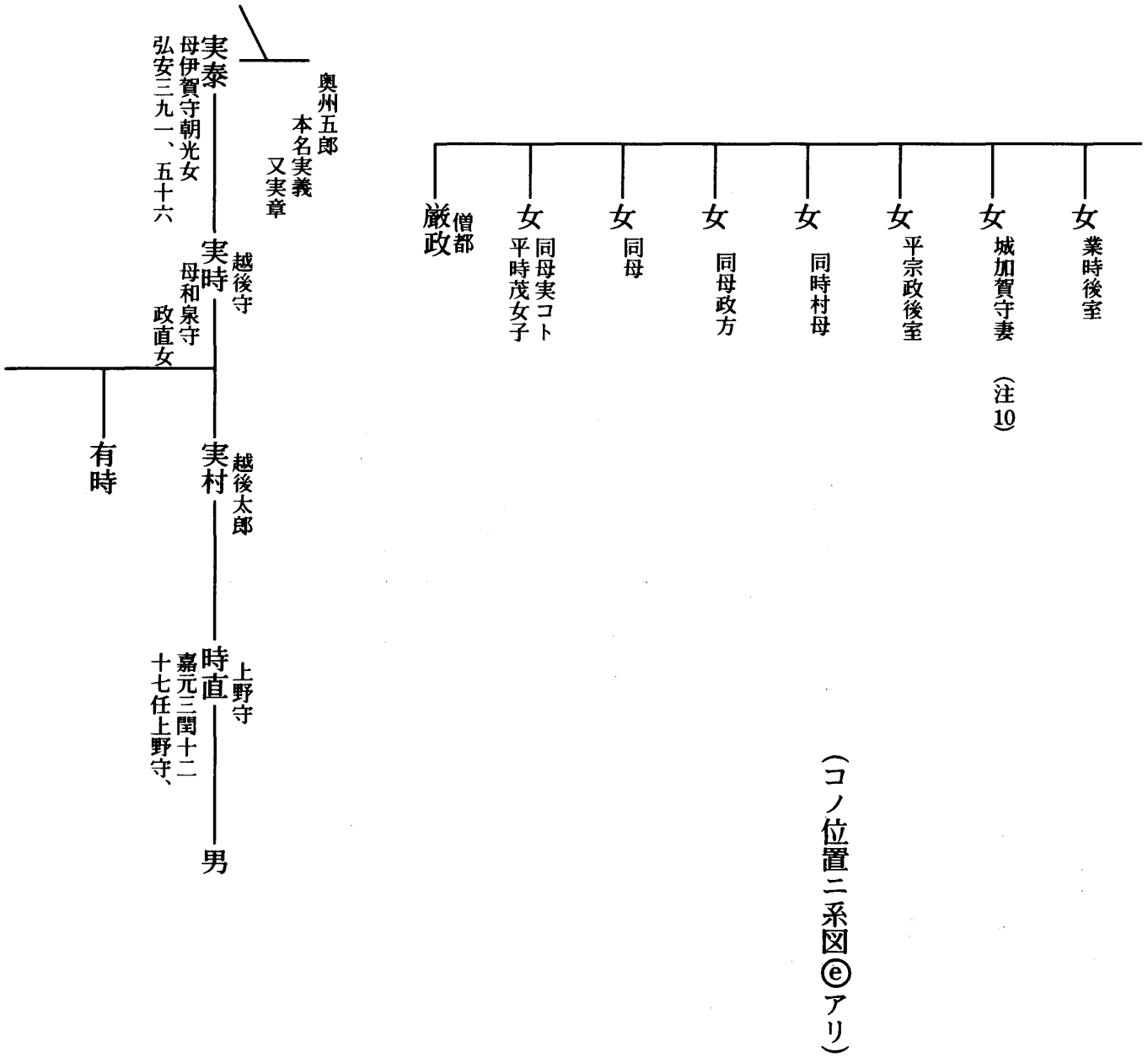

長時
義宗
久時
女
寺
長弁
時茂
陸奥守
時範
備前遠江守
貞茂
号常葉七郎
政茂
女
平宗宣室
女
足利伊与守
家時後室
（注7）
女
平時國室
女
為時室
為時女子
（注6）
女
号宗時室、離別
女
足利中務大輔
義氏室
女
平時遠室
女
唐橋中将室
女
新田太郎室


(6)
(7)
塩田武蔵入道
義政
弘安四十一廿八卒
時治
備中守
國時
駿河守
平左衛門入道没倒之時、
浴本領勲功賞、
四郎丸
修理亮
（注8）
女
女
業時
陸奥守
弘安十六廿六卒
卅六
時兼
尾帳守
永仁四六十四死
基時
任讃岐守、
女
兼時室
本名時業
忠時
陸奥十郎
左近大夫将監
女
秦盛妻離別
時村同離別即出家
号藤岡門

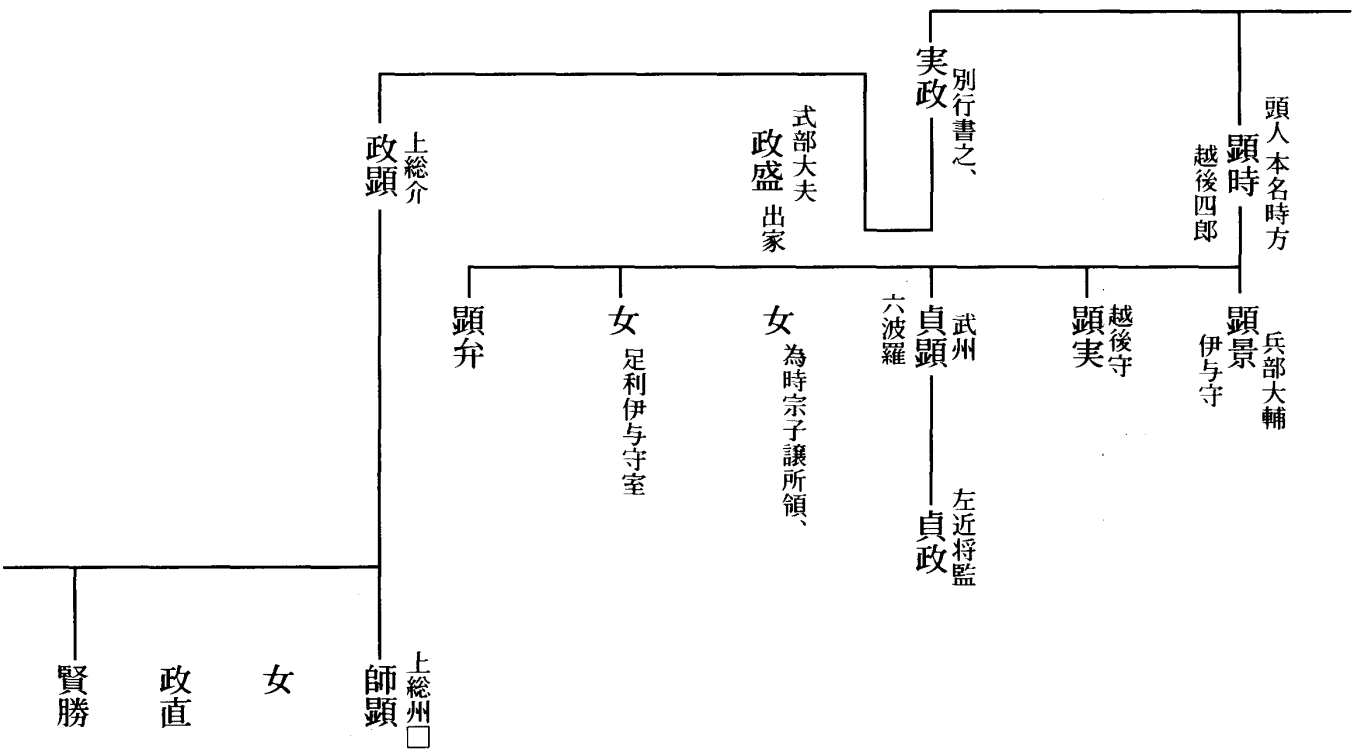

女 平時頼後室 時宗母
女 経綱室 難産死
宇津宮尾帳守 （注9）
女 平教時室 難産死
女 平公時室
政村 左京権大夫
時通 次郎 出家
政通 次郎
女
五郎
時村 陸奥守 左京権大夫 正安三八廿三 合判 嘉元三四廿 被討了、
宗時 三郎死
為時
貞泰 今者熙時

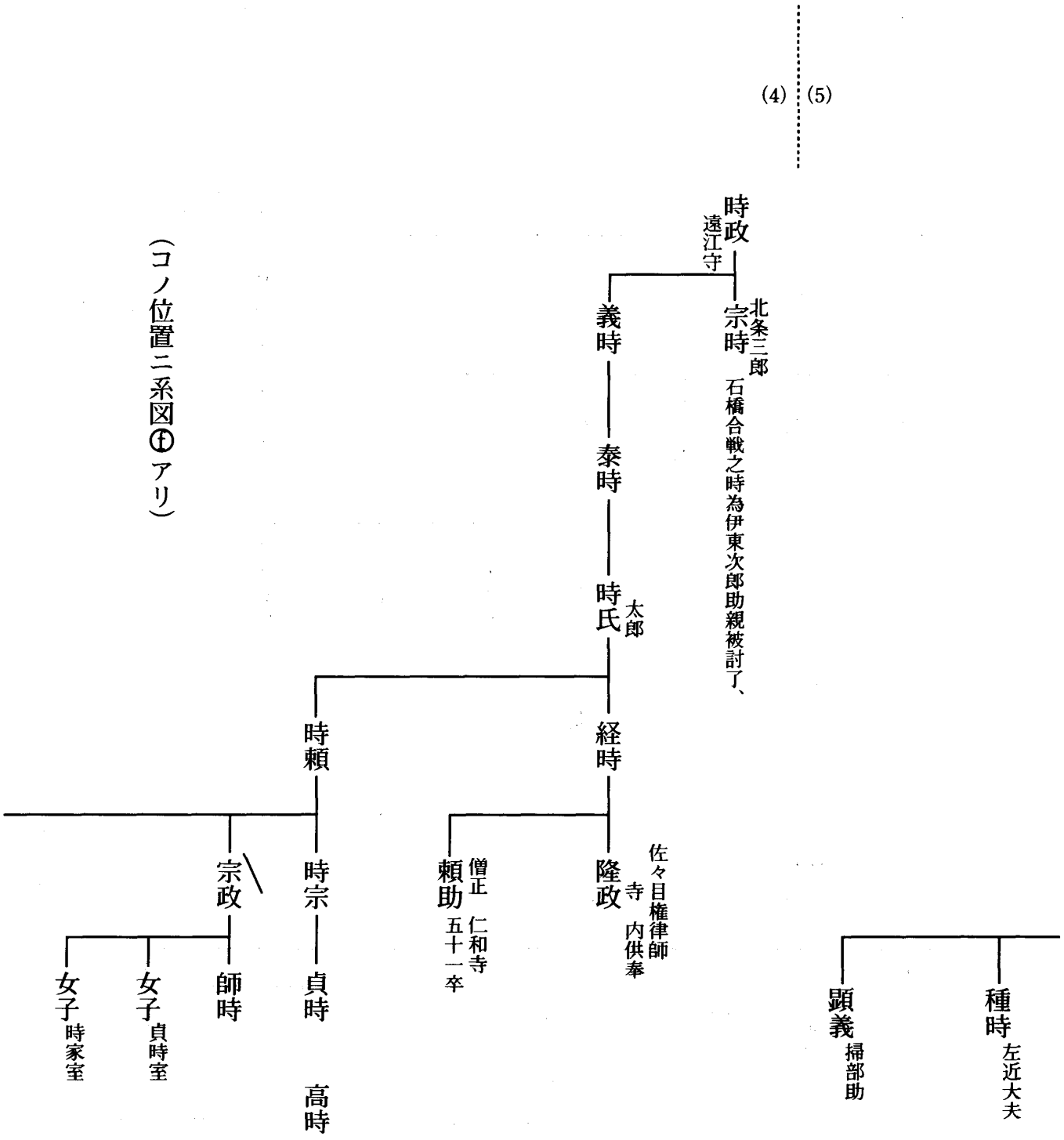
（コノ位置ニ系図◎アリ）


(5)
(6)
頭人
駿河守
政長
次郎
師村
三郎
六郎
貞政
掃部助
近江守
政頼
女
○六郎
女
式部大夫
遠江守
政方
女
女
重時後室
女
時茂後室
時雄
政仲
左近大夫下長門、
茂村
式部大夫
同時打死
女
平貞顕室
（コノ位置ニ系図ⓓアリ）

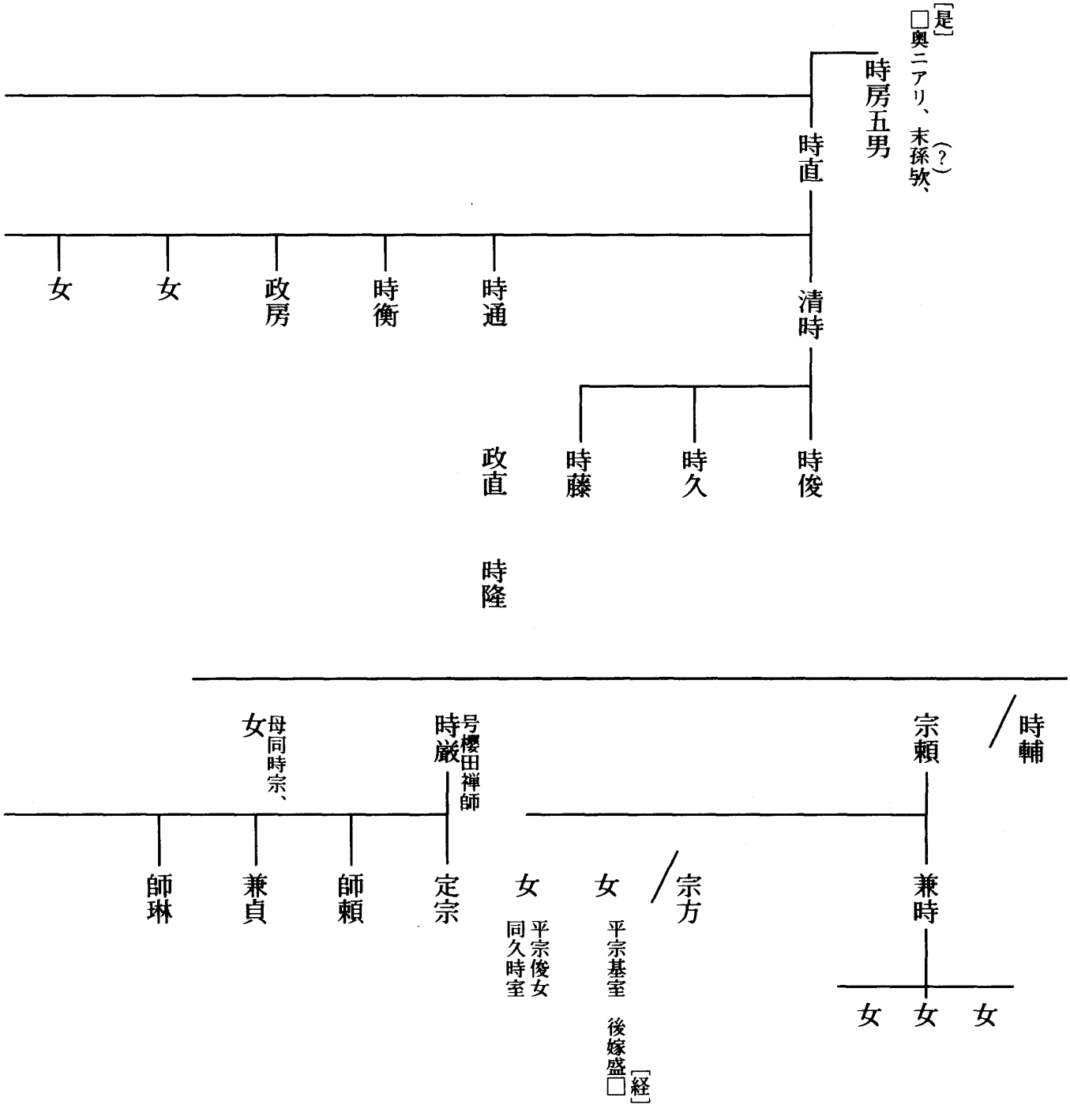

奥州五郎
本名実義
又実章
実泰
母伊賀守朝光女
弘安三九一、五十六
実時
越後守
母和泉守
政直女
有時
実村
越後太郎
時直
上野守
嘉元三閏十二
十七任上野守、
男
僧都
厳政
女
同母実コト
平時茂女子
女
同母
女
同母政方
女
同時村母
女
平宗政後室
女
城加賀守妻
（注10）
女
業時後室

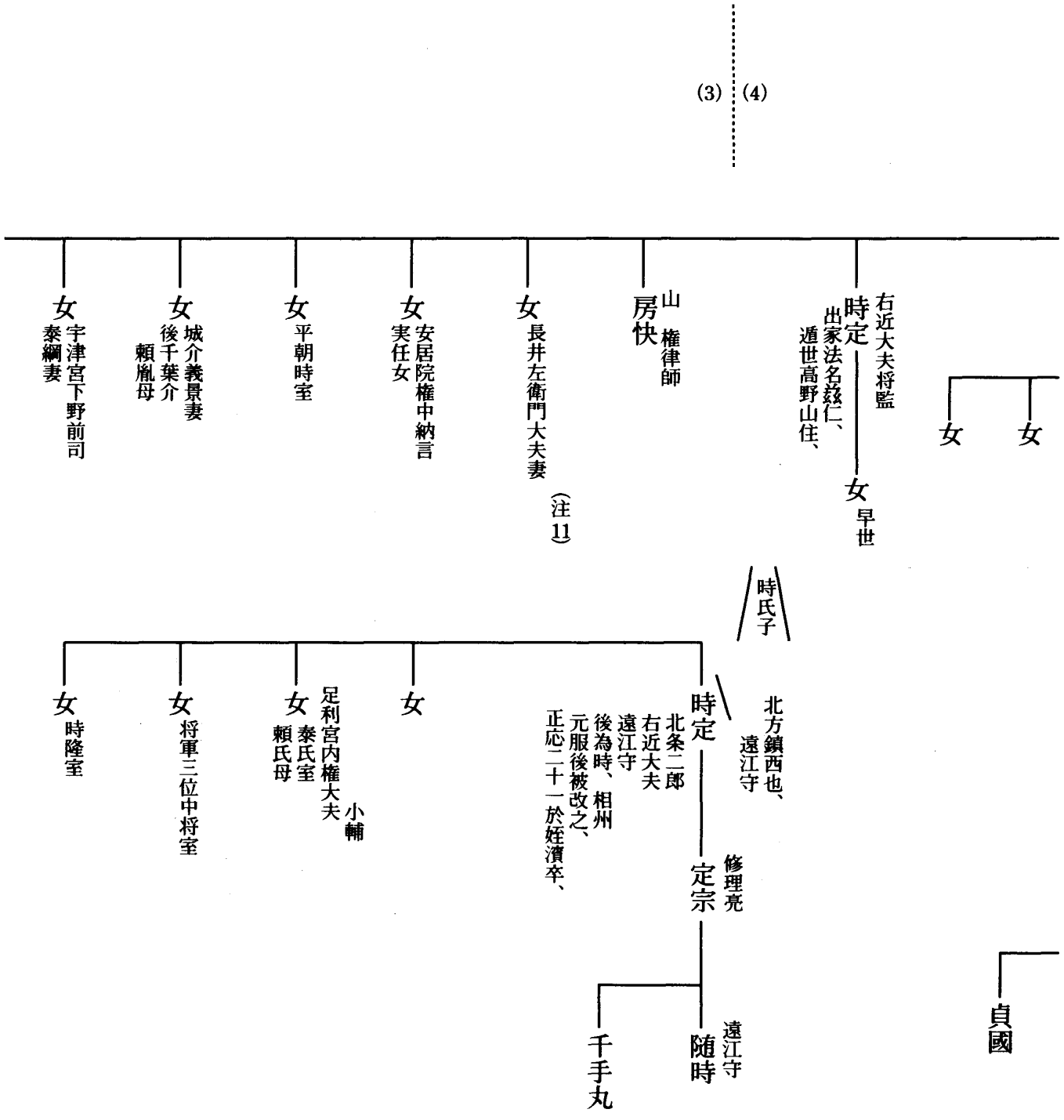
（コノ位置ニ系図ⓔアリ）

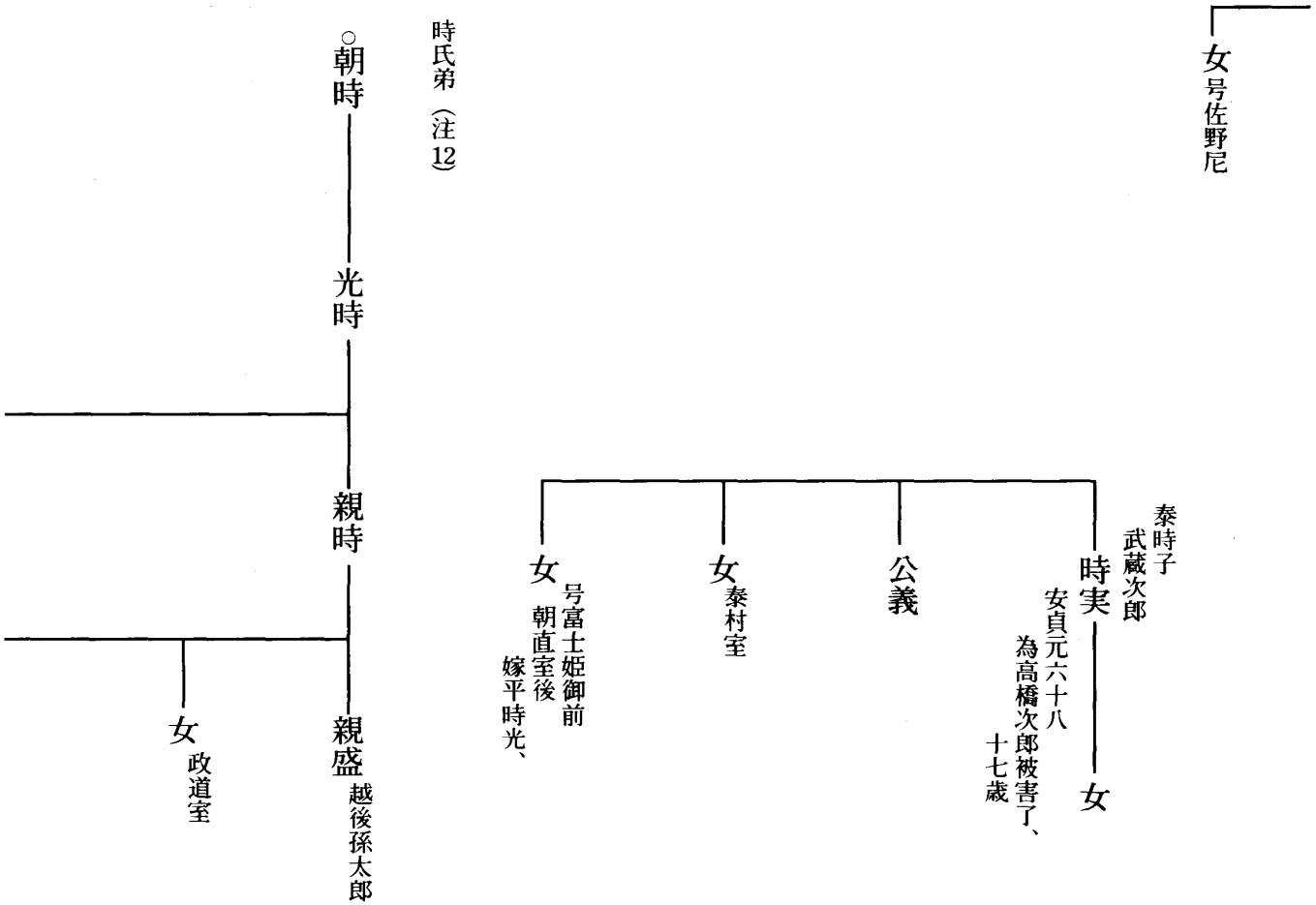

頭人 本名時方
顕時
越後四郎
兵部大輔
顕景
伊与守
越後守
顕実
武州
貞顕
六波羅
左近将監
貞政
別行書之、
実政
式部大夫
政盛 出家
女
為時宗子譲所領、
女
足利伊与守室
顕弁
上総介
政顕
上総州□
師顕
女
政直
賢勝

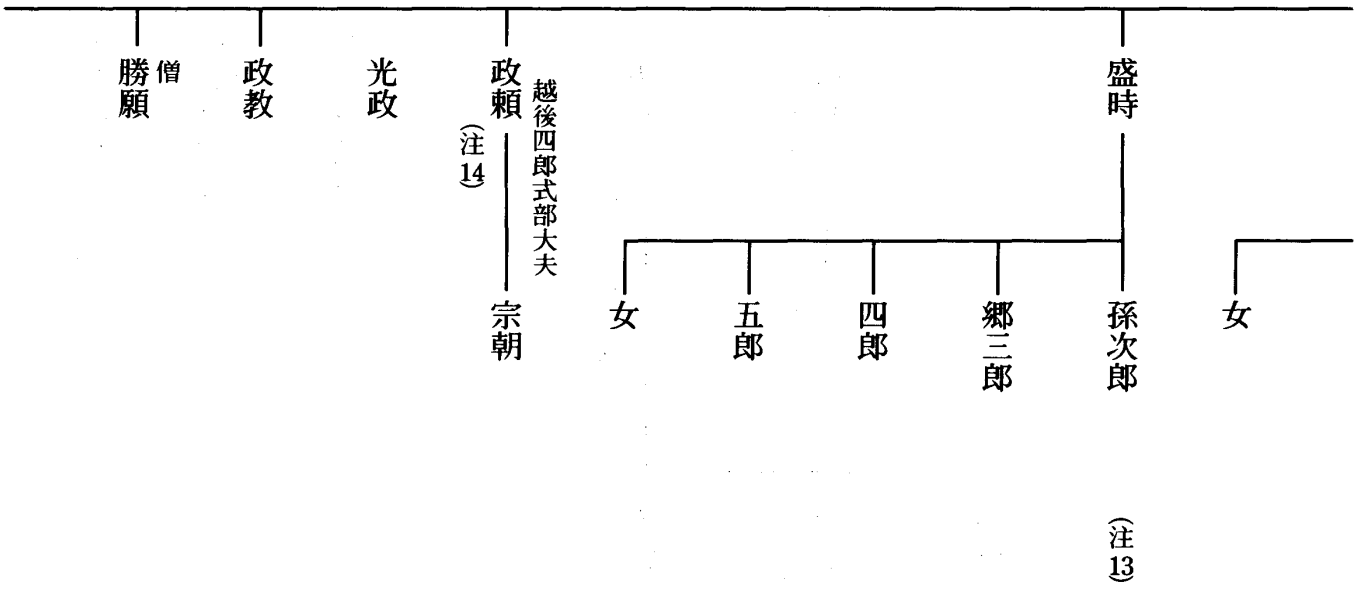

(4)
(5)
時政
遠江守
北条二郎
宗時
石橋合戦之時為伊東次郎助親被討了、
義時
泰時
時氏
太郎
時頼
経時
宗政
時宗
貞時
高時
師時
女子
時家室
女子
貞時室
僧正
頼助
仁和寺
五十一卒
隆政
佐々目権律師
寺
内供奉
顕義
掃部助
種時
左近大夫

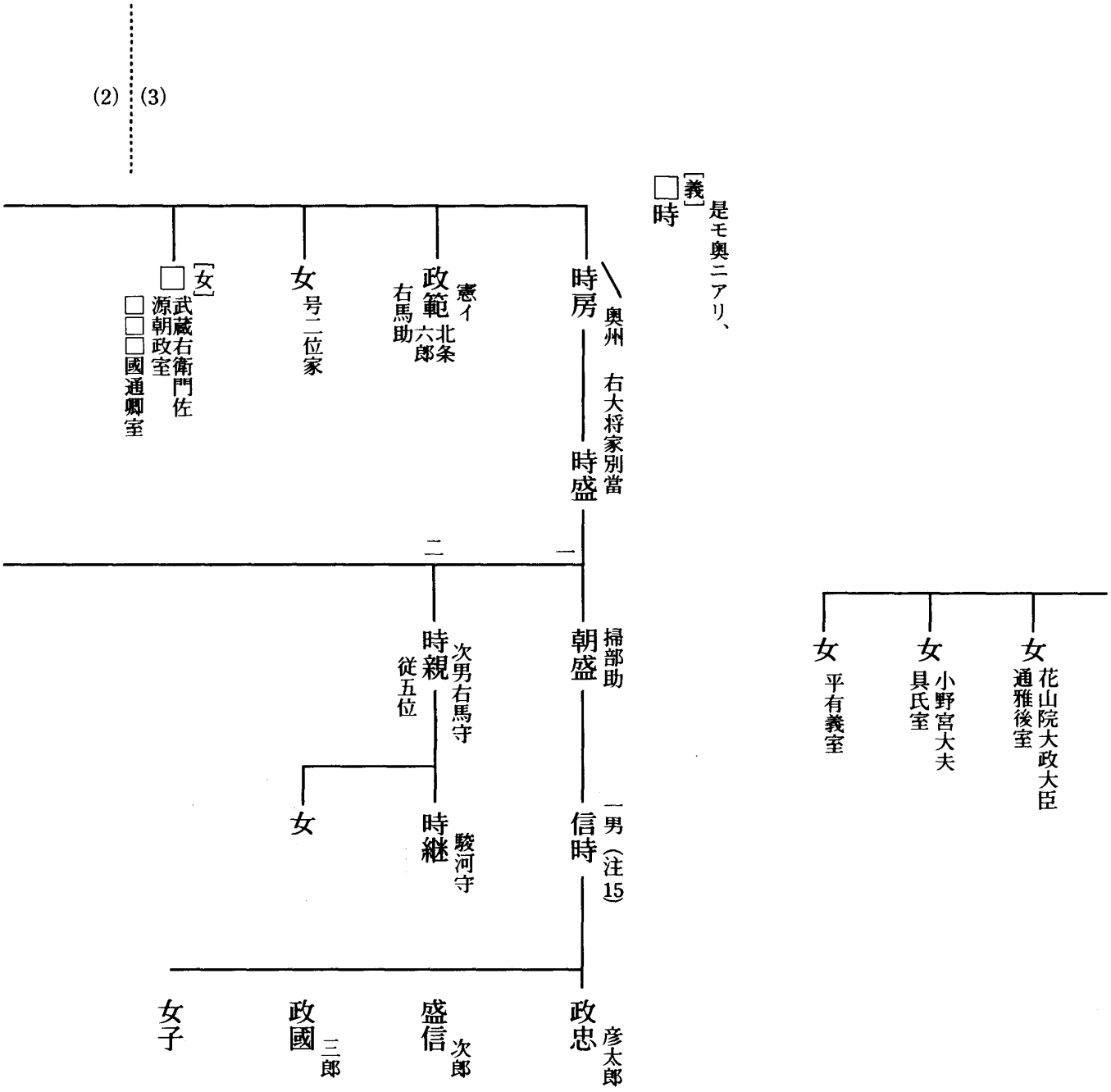
（コノ位置ニ系図㊦アリ）

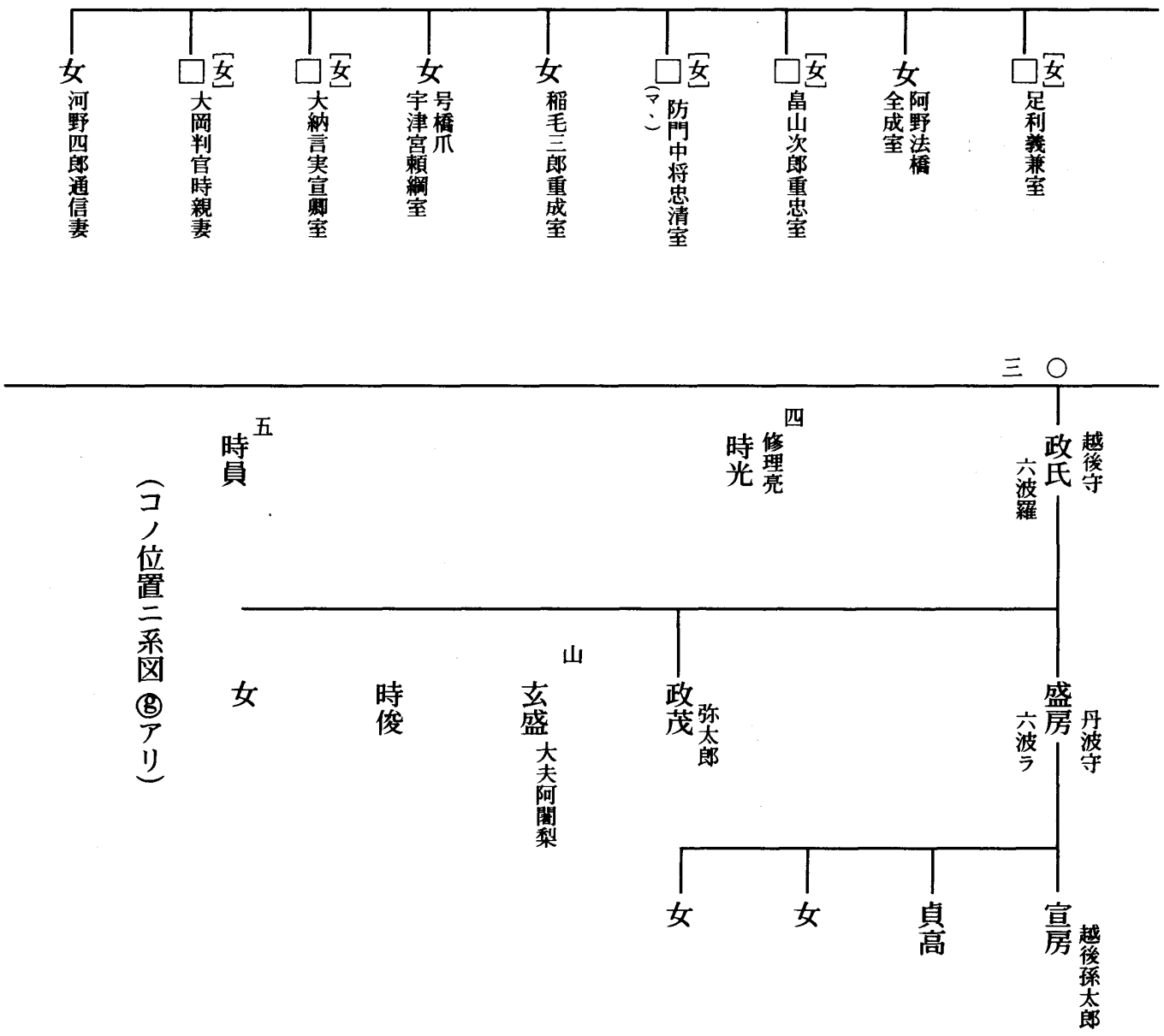

［是］
□奥ニアリ、末孫欤、(?)
時房五男
時直
女
女
政房
時衡
時通
清時
時藤
時久
時俊
政直
時隆
時輔
宗頼
兼時
女
女
女
宗方
女
平宗俊女
同久時室
女
平宗基室
後嫁盛□［経］
号櫻田禅師
時厳
母同時宗、
女
師琳
兼貞
師頼
定宗

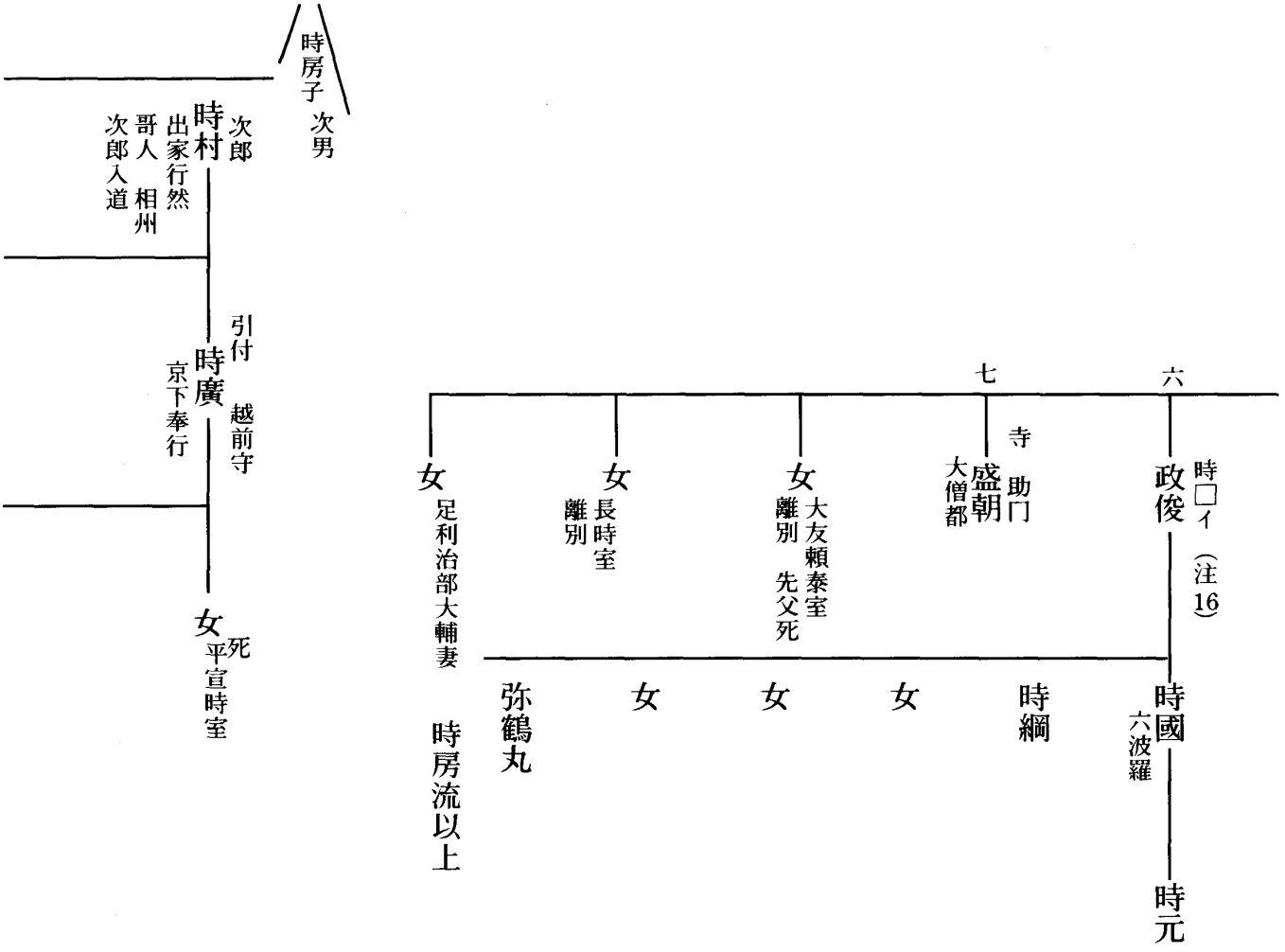

(3)
(4)
右近大夫将監
時定
出家法名玆仁、
遁世高野山住、
女
早世
女
女
山
房快
権律師
女
長井左衛門大夫妻
（注11）
女
安居院権中納言
実任女
女
平朝時室
女
城介義景妻
後千葉介
頼胤母
女
宇津宮下野前司
泰綱妻
時氏子
北方鎮西也、
遠江守
時定
北条二郎
右近大夫
遠江守
後為時、相州
元服後被改之、
正応二十一於姪濱卒、
女
女
足利宮内権大夫
小輔
女
泰氏室
頼氏母
女
将軍三位中将室
女
時隆室
修理亮
定宗
遠江守
随時
千手丸
貞國

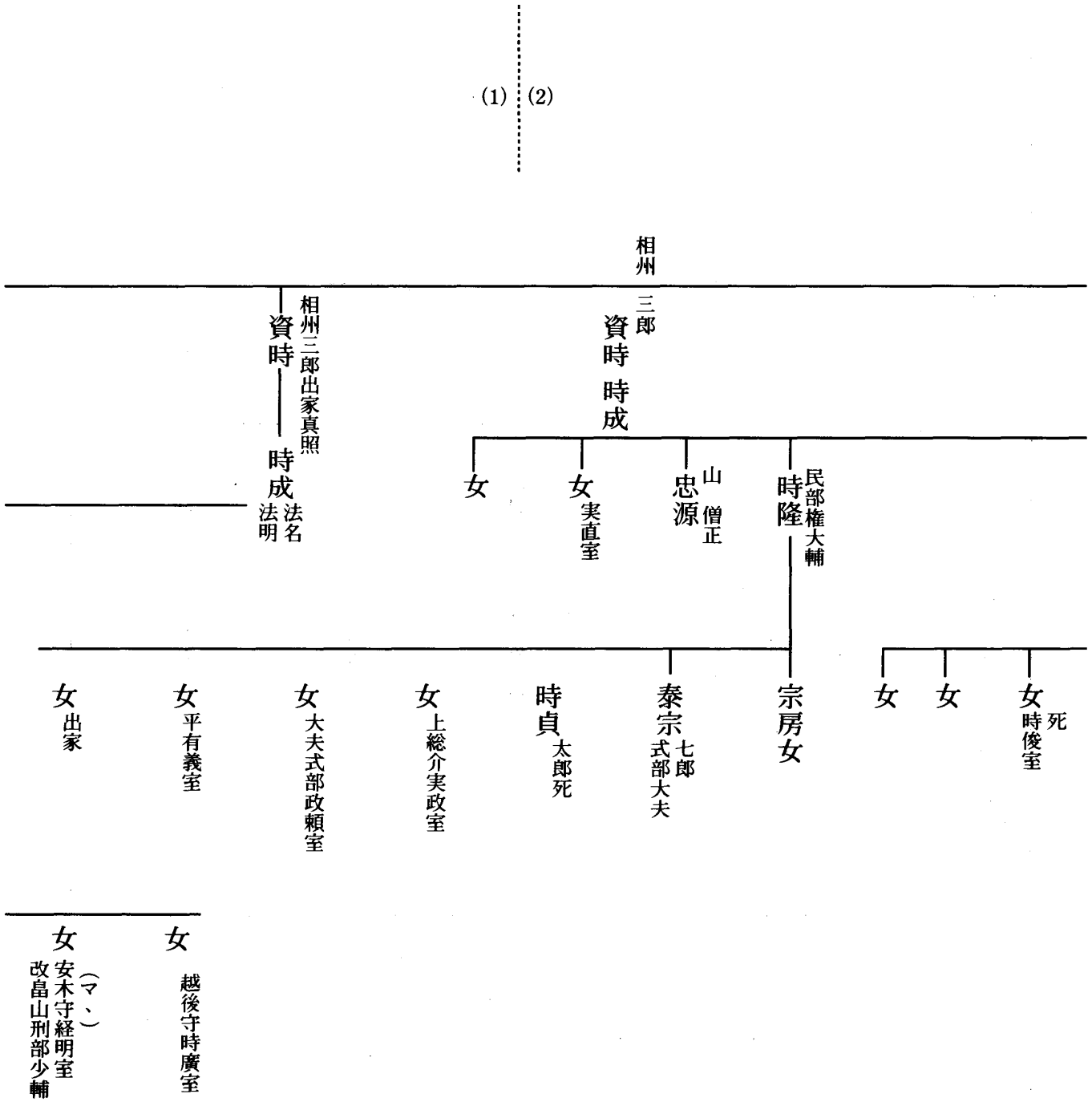

女 号佐野尼
泰時子
武蔵次郎
時実
女
安貞元六十八
為高橋次郎被害了、
十七歳
公義
女 泰村室
女 号富士姫御前
朝直室後
嫁平時光、
時氏弟（注12）
○朝時
光時
親時
親盛 越後孫太郎
女 政道室

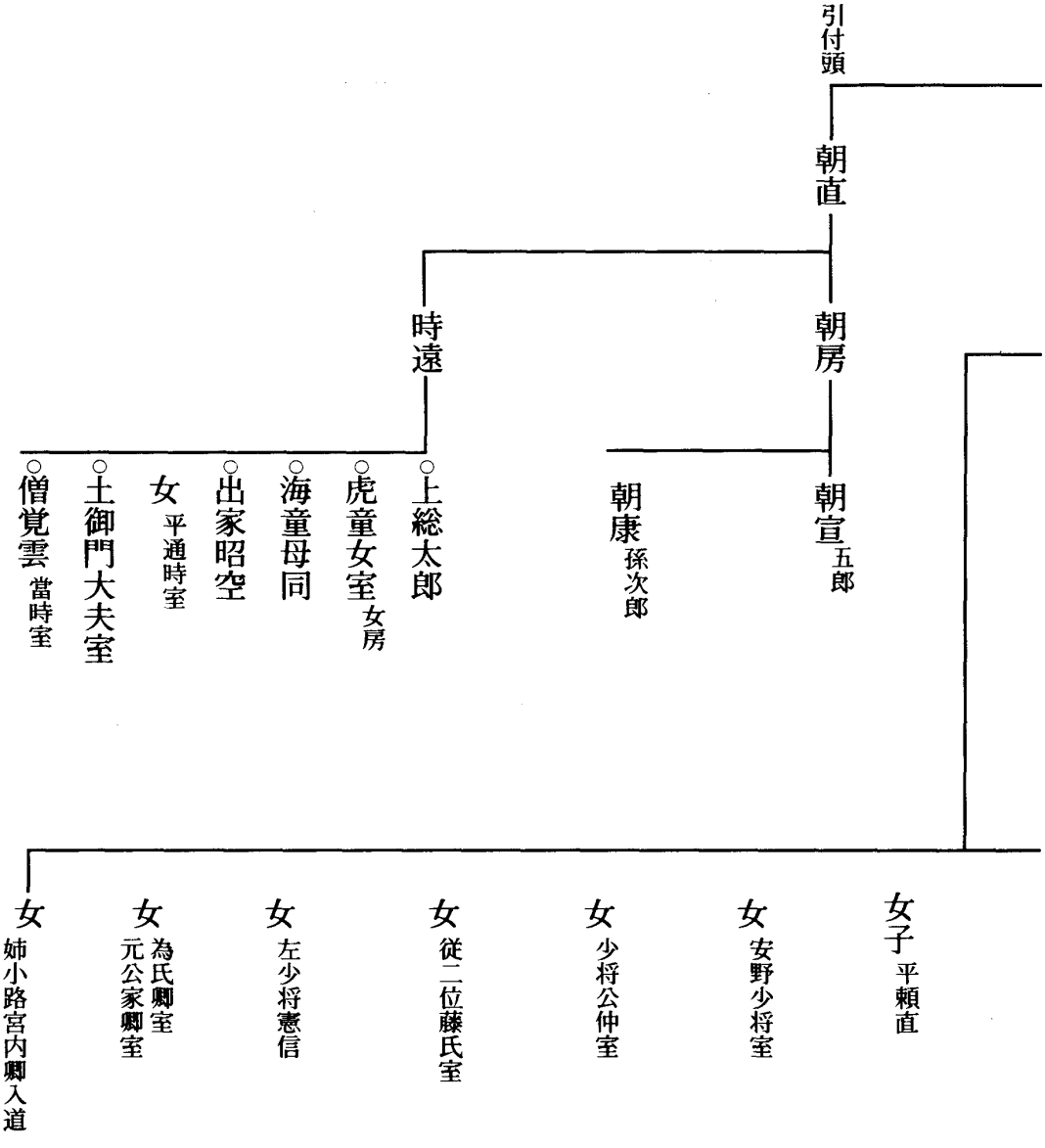

盛時
女
孫次郎
（注13）
郷三郎
四郎
五郎
女
越後四郎式部大夫
政頼
（注14）
宗朝
光政
政教
僧
勝願


(2)
(3)
是モ奥ニアリ、
[義]
□時
時房
奥州
右大将家別當
時盛
政範
憲イ
北条
六郎
右馬助
女
号二位家
[女]
□
武蔵右衛門佐
源朝政室
□□□國通卿室
二
一
朝盛
掃部助
時親
次男右馬守
従五位
女
時継
駿河守
信時
一男（注15）
政忠
彦太郎
盛信
次郎
政國
三郎
女子
女
花山院大政大臣
通雅後室
女
小野宮大夫
具氏室
女
平有義室


□［女］足利義兼室
女阿野法橋全成室
□［女］畠山次郎重忠室
□［女］防門中将忠清室（マヽ）
女稲毛三郎重成室
女号橘爪宇津宮頼綱室
□［女］大納言実宣卿室
□［女］大岡判官時親妻
女河野四郎通信妻
三 ○
越後守 政氏 六波羅
四 修理亮 時光
五 時員
女
時俊
山 玄盛 大夫阿闍梨
政茂 弥太郎
丹波守 盛房 六波ラ
女
女
貞高
越後孫太郎 宣房
（コノ位置ニ系図⑧アリ）

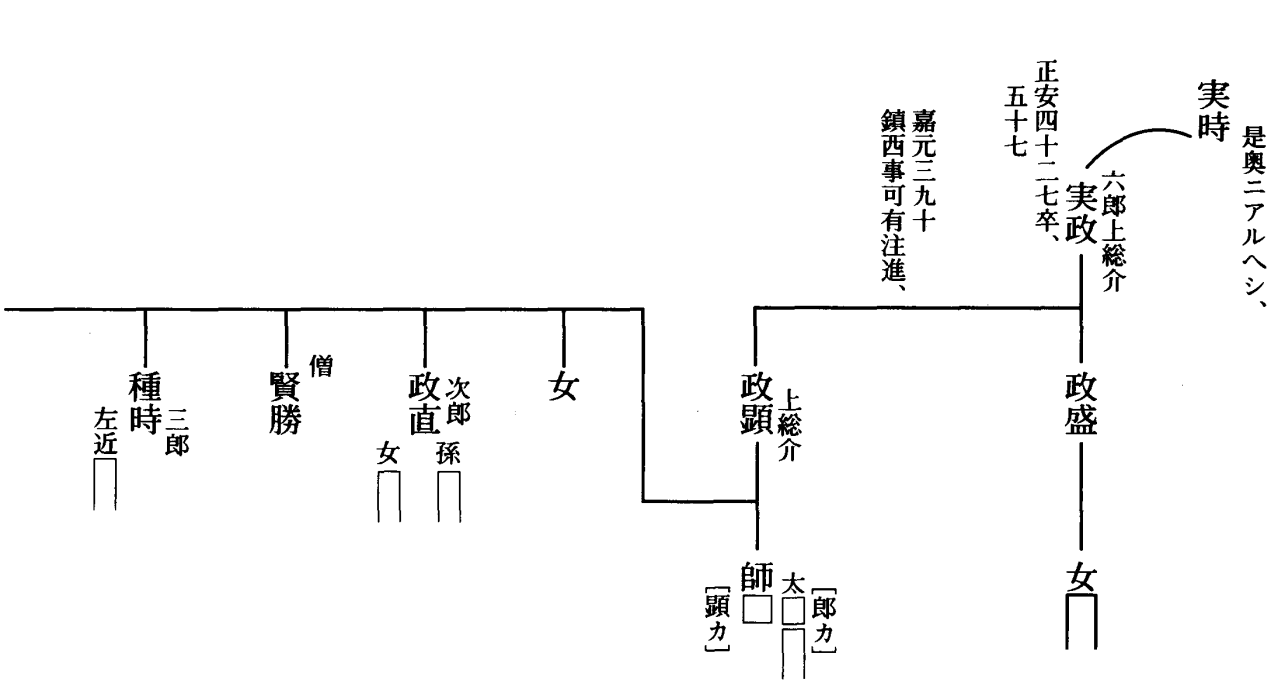

時房子　次男
次郎
時村
出家行然
哥人　相州
次郎入道
引付　越前守
時廣
京下奉行
女
死
平宣時室
七
六
女
足利治部大輔妻
時房流以上
女
長時室
離別
女
大友頼泰室
離別　先父死
寺　助門
盛朝
大僧都
時□イ
（注16）
政俊
弥鶴丸
女
女
時綱
時國
六波羅
時元


(1)
(2)
相州
三郎
資時
時成
相州三郎出家真照
資時
時成
法名
法明
女
女
実直室
山
僧正
忠源
民部権大輔
時隆
女
女
女
死
時俊室
宗房女
泰宗
七郎
式部大夫
時貞
太郎死
女
上総介実政室
女
大夫式部政頼室
女
平有義室
女
出家
女
越後守時廣室
女
（マヽ）
安木守経明室
改畠山刑部少輔

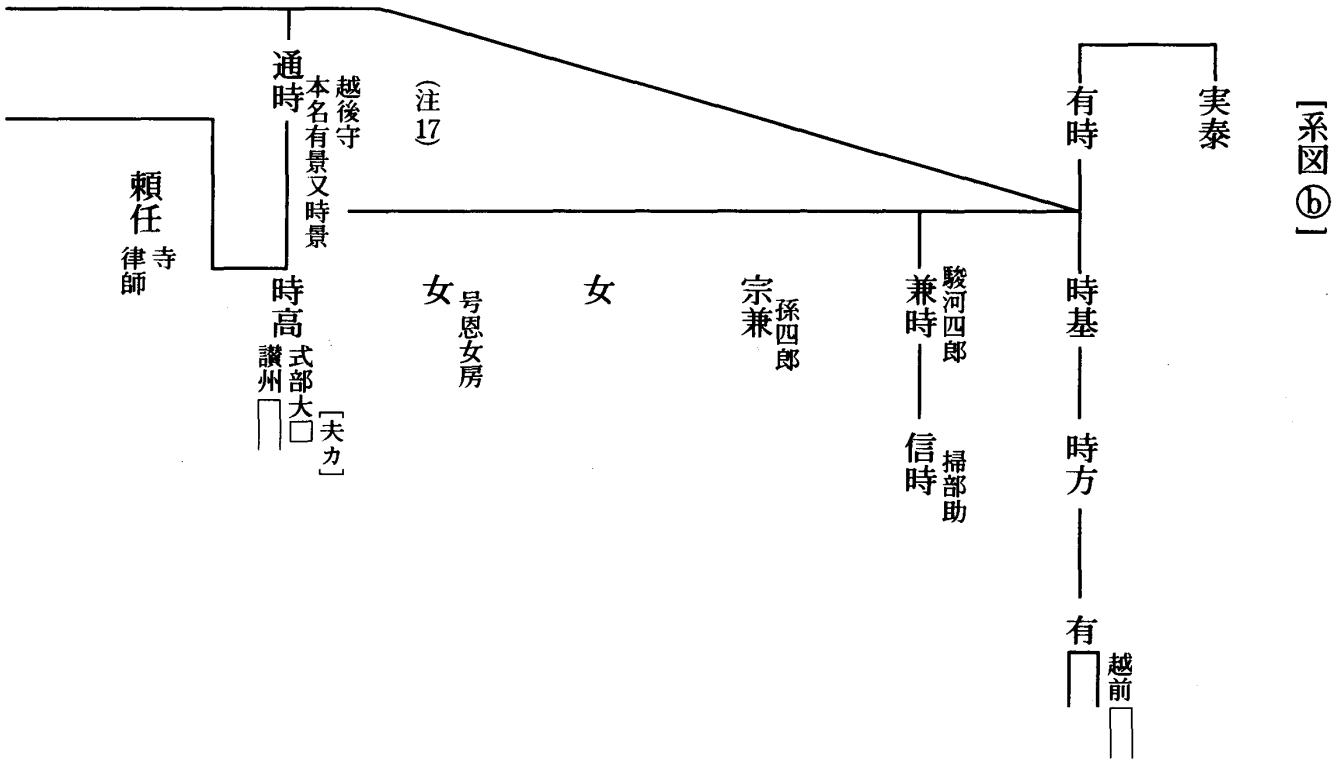


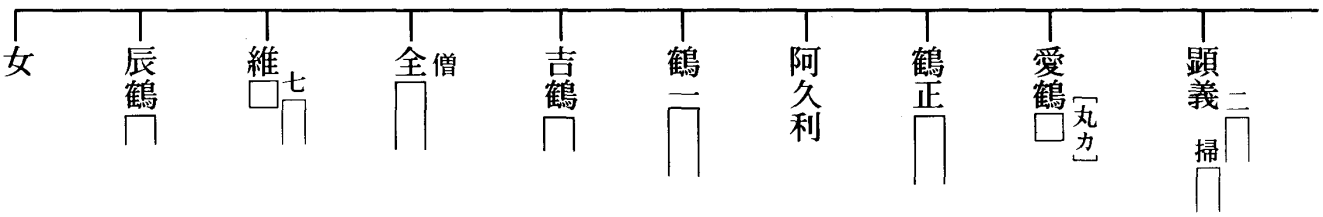
（系図「四番」デハ、コノ位置ニ奥書「宝徳二年壬二申三月吉日　重梁書之」アリ）

【系図ⓐ】


実時
是奥ニアルヘシ、
正安四十二七卒、
五十七
六郎上総介
実政
嘉元三九十
鎮西事可有注進、
政盛
女
政顕
上総介
師□
太□［郎カ］
［顕カ］
女
政直
次郎
孫
女
賢勝
僧
種時
三郎
左近

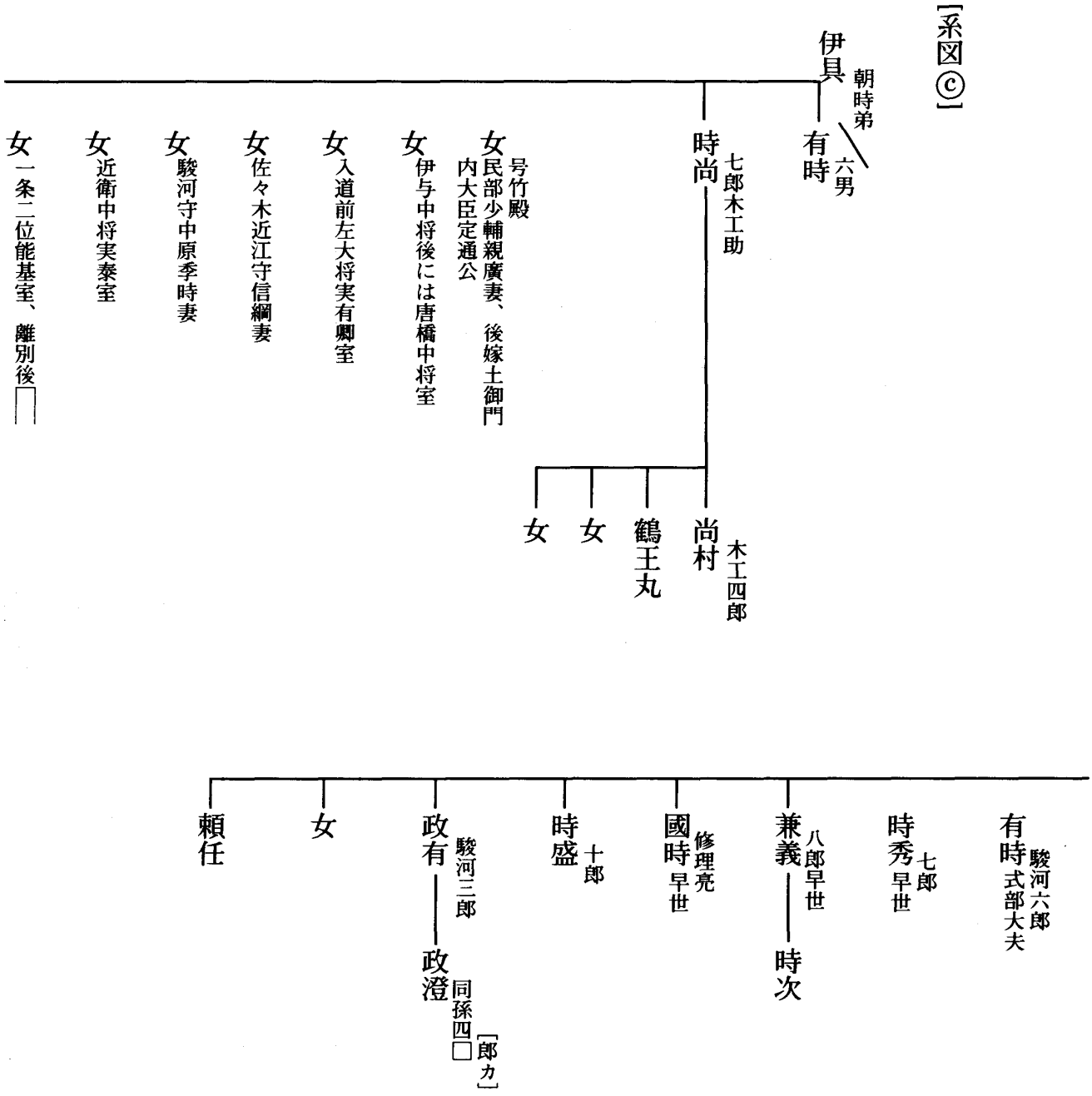
【系図ⓑ】


実泰
有時
時基
時方
有
越前
駿河四郎
兼時
掃部助
信時
宗兼
孫四郎
女
女
号恩女房
通時
越後守
本名有景又時景
（注17）
頼任
寺
律師
時高
式部大□
讃州
［夫カ］

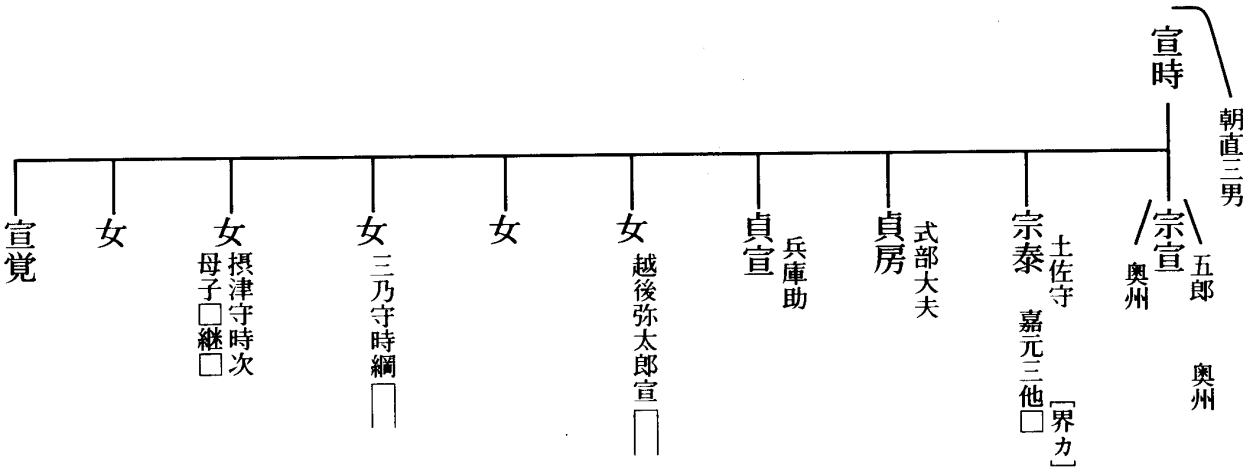


女　号戸守
女　号中澤尼
女　号大藤
女　号伊豆丸
女　号西女房
女　号赤河女房
女　号今泉
女　号中町　針
女　号金澤
女　早世

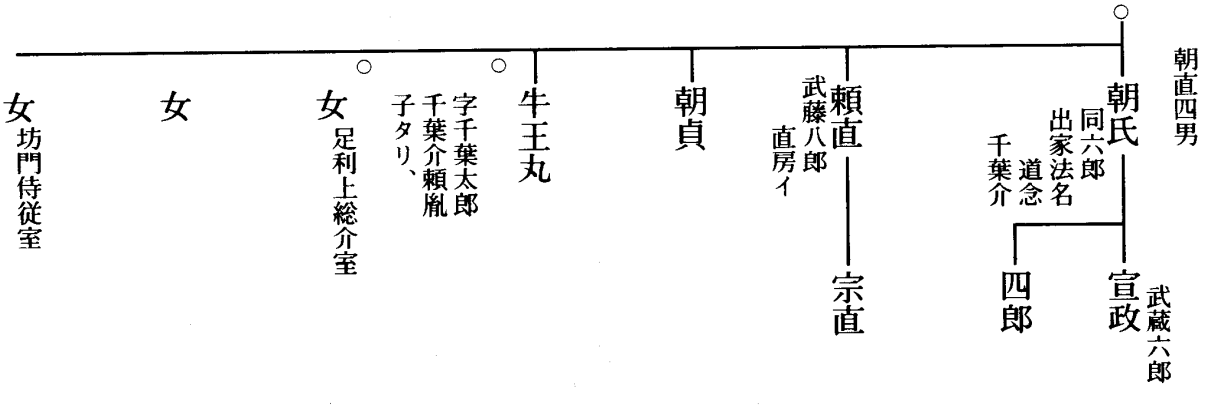
［系図ⓒ］


伊具
朝時弟
有時
六男
時尚
七郎木工助
女
号竹殿
女民部少輔親賢妻、後嫁土御門内大臣定通公
女伊与中将後には唐橋中将室
女入道前左大将実有卿室
女佐々木近江守信綱妻
女駿河守中原季時妻
女近衛中将実泰室
女一条二位能基室、離別後
女
女
鶴王丸
尚村
木工四郎
有時
駿河六郎
式部大夫
時秀
七郎
早世
兼義
八郎早世
時次
國時
修理亮
早世
時盛
十郎
政有
駿河三郎
政澄
同孫四□
［郎カ］
女
頼任

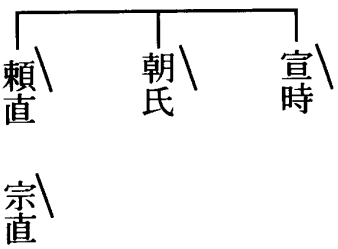
【系図ⓓ】


宣時
朝直三男
宗宣
五郎
奥州
奥州
宗泰
土佐守
嘉元三他□
［界カ］
貞房
式部大夫
貞宣
兵庫助
女
越後弥太郎宣□
女
女
女
三乃守時綱□
女
摂津守時次
母子□継□
女
女
宣覚

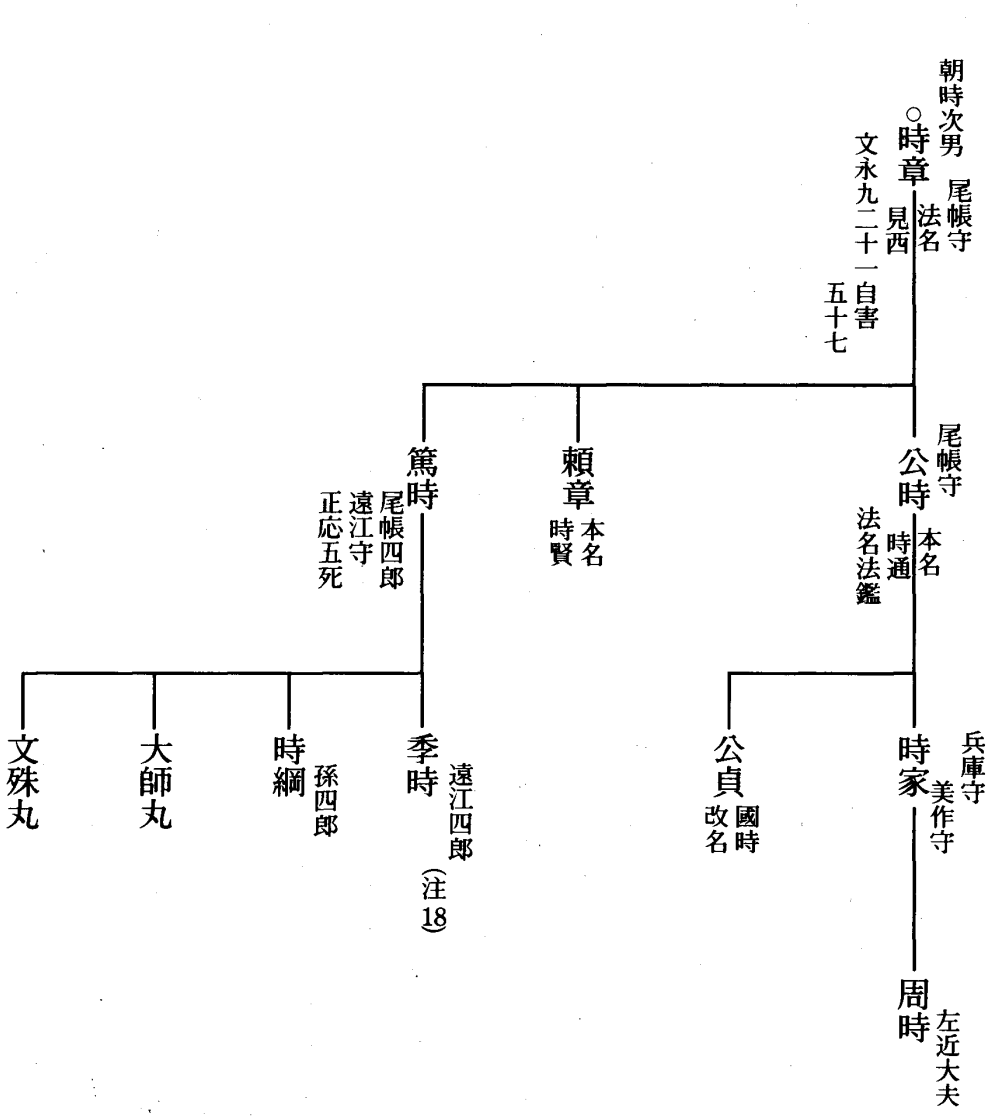
【系図ⓔ】


朝直四男
朝氏
同六郎
出家法名
道念
千葉介
宣政
武蔵六郎
四郎
宗直
武藤八郎
直房イ
頼直
朝貞
牛王丸
字千葉太郎
千葉介頼胤
子タリ、
女
足利上総介室
女
女
坊門侍従室

【系図ⓕ】


宣時
朝氏
頼直
宗直

【系図ⓖ】


朝時次男
尾帳守
○時章
法名
見西
文永九二十一自害
五十七
尾帳守
公時
本名
時通
法名法鑑
篤時
尾帳四郎
遠江守
正応五死
頼章
本名
時賢
公貞
國時
改名
兵庫守
時家
美作守
周時
左近大夫
文殊丸
大師丸
時綱
孫四郎
季時
遠江四郎
（注18）

注

（1）坂上田村麻呂に関する伝承は多いが、例えば『大百科事典』6（平凡社、一九八五年）所収「坂上田村麻呂」項の「田村麻呂をめぐる伝承」（山本吉左右執筆）や、高橋崇『坂上田村麻呂　新稿版』（吉川弘文館、昭和六一年＝一九八六）の「六伝説につつまれて―後世、田村麻呂像諸相―」は要約として便利である。この系図「五番」における記事内容も、概ねこれらと符合する。

（2）ここで他の諸系図に収録される北条氏系図とは、一般に知られている『尊卑分脈』（四、『国史大系』六〇巻下）、『続群書類従』（六輯上）、『系図纂要』（第八冊、名著出版刊行影印本）、前田家本『諸家系図』（原本仁和寺所蔵）、正宗寺本『諸家系図』に含まれる北条氏系図、および先年紹介された野津本『北条系図』（皇學館大学現蔵福富家文書）を指し、合わせて六種となる。（補注1）参照。

（3）なお系図「弐番」②（実は末尾）では、この「時章」の下に直接、系図ⓖ（後掲）を繋げ、系図「四番」へと続いている。

（4）「時兼」の女二人（平篤時室、宗教室）は、本系図「五番」オモテでは単に「女子」（一人）と表記されている。

（5）この「長時」は、左側に注記「仲か」とあり、「五番」オモテでは「仲時」と記されているが、前田家本や野津本では「長重」と見え、うち特に前田家本では「長重陸奥八郎」とある。

（6）この辺は追加（挿入）部分だが、「為時女子」とあるので、この系線は正確には「為時」の下、「時久」「為宗」らと横並びにすべきだろう（［図4］参照）。因みに、ここに「為時女子」として見える「女唐橋中将室」は、野津本で「為時」の子供として見える「女子唐橋中将室」と同一人だといえ、両系図（系図「五番」ウラと野津本）の記事が符合する。

（7）この「時茂」の女（足利家時後室）は、該当の諸系図（『尊卑分脈』四、桓武平氏北条など）、即ち北条氏側の系図には一向に見当たらないが、例えば『尊卑分脈』三（清和源氏足利、二五一ページ）に足利家時の子息の項に「貞氏母平時茂女」と見えるなど、却って足利氏側の系図に見かける。

（8）この「四郎丸」は、正宗寺本に時治・国時の弟として見える「胤時四郎」のことだろう。

（9）この女（宇都宮経綱室）は、「重時」の女子の一人で、女（北条時頼後室）の妹であって、野津本では「女子性綱妻」とあるが、例えば『尊卑分脈』一（藤氏北家、道兼公孫宇都宮、二六二ページ）に宇都宮経綱の子女の項に「女子母平重時女」と見える。

（10）この女（城加賀守妻）は、『系図纂要』第八冊（平氏五北条、二九六ページ）に北条「政長」の妹として見える「女加賀守藤顕盛妻」と同一人だろう。

（11）以下、六名の女があり、いずれも具体的注記をもつが、「五番」オモテでは「女五人」と表記されているに過ぎない。

（12）ここで朝時に対して「時氏弟」と注しているが、正しくは「泰時弟」とでもすべきだろう（時氏は泰時の子）。ケアレス・ミスかもしれないが。

（13）この「孫次郎」は、正宗寺本では「通時孫二良」とある。

（14）ここで「政頼」とあるが、この位置（光時の子で、宗朝の父）に、前田家本では「政俊」（遠江守、式部大夫）が見える。

あるいは「政頼」と「政俊」は同一人かもしれない（改名あって）。

(15) ここで「時盛―朝盛―信時」とあるが、前田家本では「時盛―時景（改朝盛）―時顕（改時信）」と見え、政忠・盛信らに続く。

(16) この「政俊」は、時盛の子息で、「時国」や「時綱」の父だが、前田家本では「時俊」と見える。

(17) この辺、追加（挿入）部分のため、聊か系線が複雑で（「図4」参照）、「通時」の位置が気に懸かるが、他の諸系図（北条氏系図）によって、通時は確かに「有時」の子息、即ち「時基」らと兄弟だといえる。

(18) この「季時」は、篤時の子息だが、前田家本や正宗寺本では「秀時」と見える。

（補注1）なお、その他、野辺文書に北条氏系図が含まれ、奥書に「応安八年（一三七五）十二月一日書之」とある。『宮崎県史　史料編　中世1』（平成二年三月）に収録され、これに付して『宮崎県史しおり　第2回』に福島金治「野辺本北条氏系図について」が掲載された。私は、当時、宮崎県史編纂委員であり、あらためて職場の同僚（史料編纂所山家浩樹氏、本郷和人氏）たちとともに現地の「野辺文書」所蔵者（宮崎県都城市郡元、本村寅雄氏）宅を訪れ調査、原物を拝見した（平成九年十二月）。

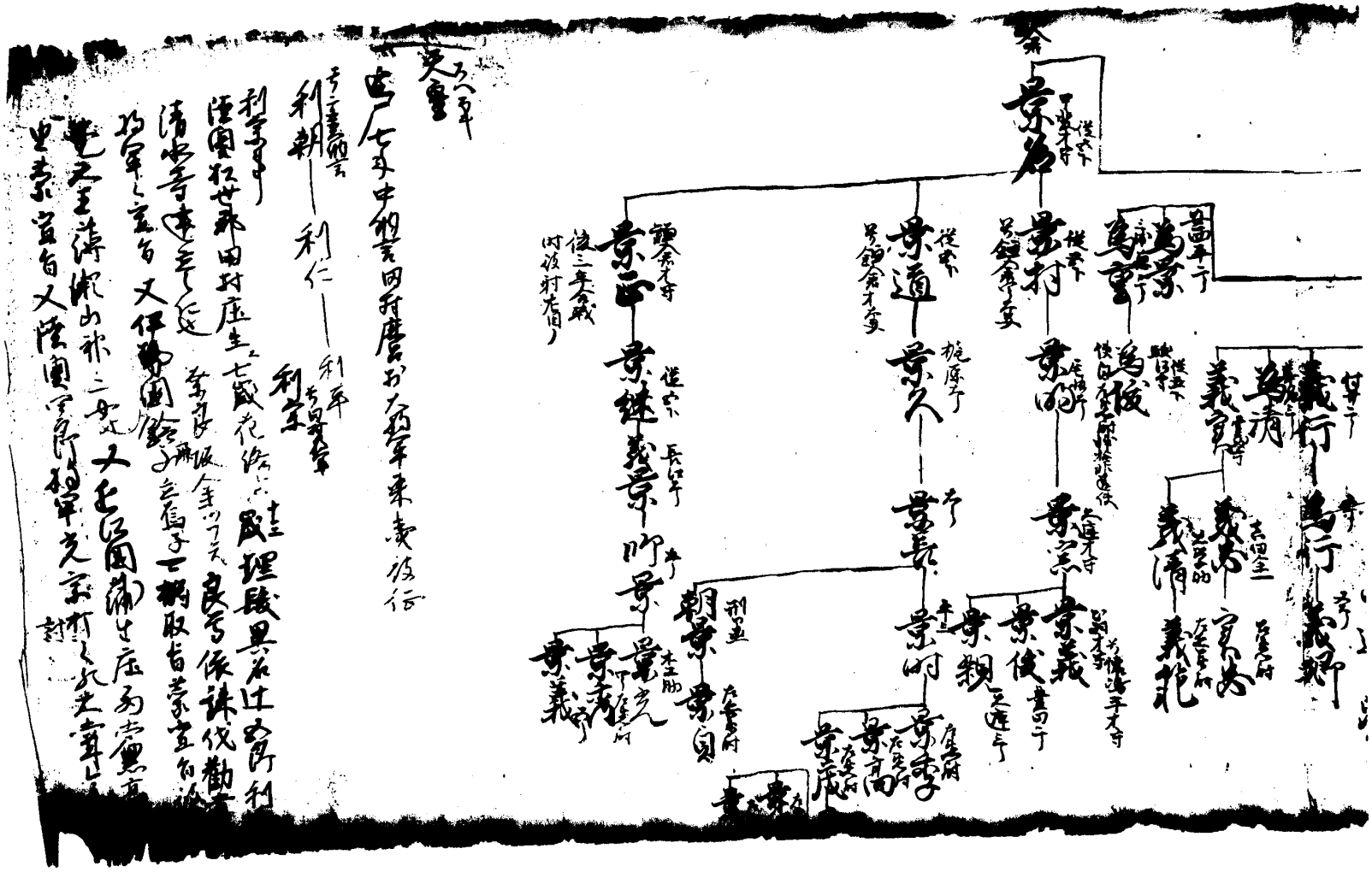
また近年、史料編纂所に『古系図集』が貴重書として入架された。一誠堂書店創業九十周年記念『古典籍善本展示即売会目録』（平成五年十一月）に掲載の「9．古系図集」を早速購入したもので（大型枡形本）、これに諸氏の系図が収録されているが（源氏・平氏・橘氏など九氏。舞人・楽人の系図もあり。但し藤氏系図なし）、この平氏のうちに、鎌倉北条氏（「号先代」）の系図も含まれている。

そして安田元久編『吾妻鏡人名総覧―注釈と考証―』（吉川弘文館、平成一〇年二月）が刊行され、特にその第Ⅱ部の「北条氏系図考証」において、極めて詳細な北条氏系図（各流ごと）を作成（集成）、提示されていて有難い。

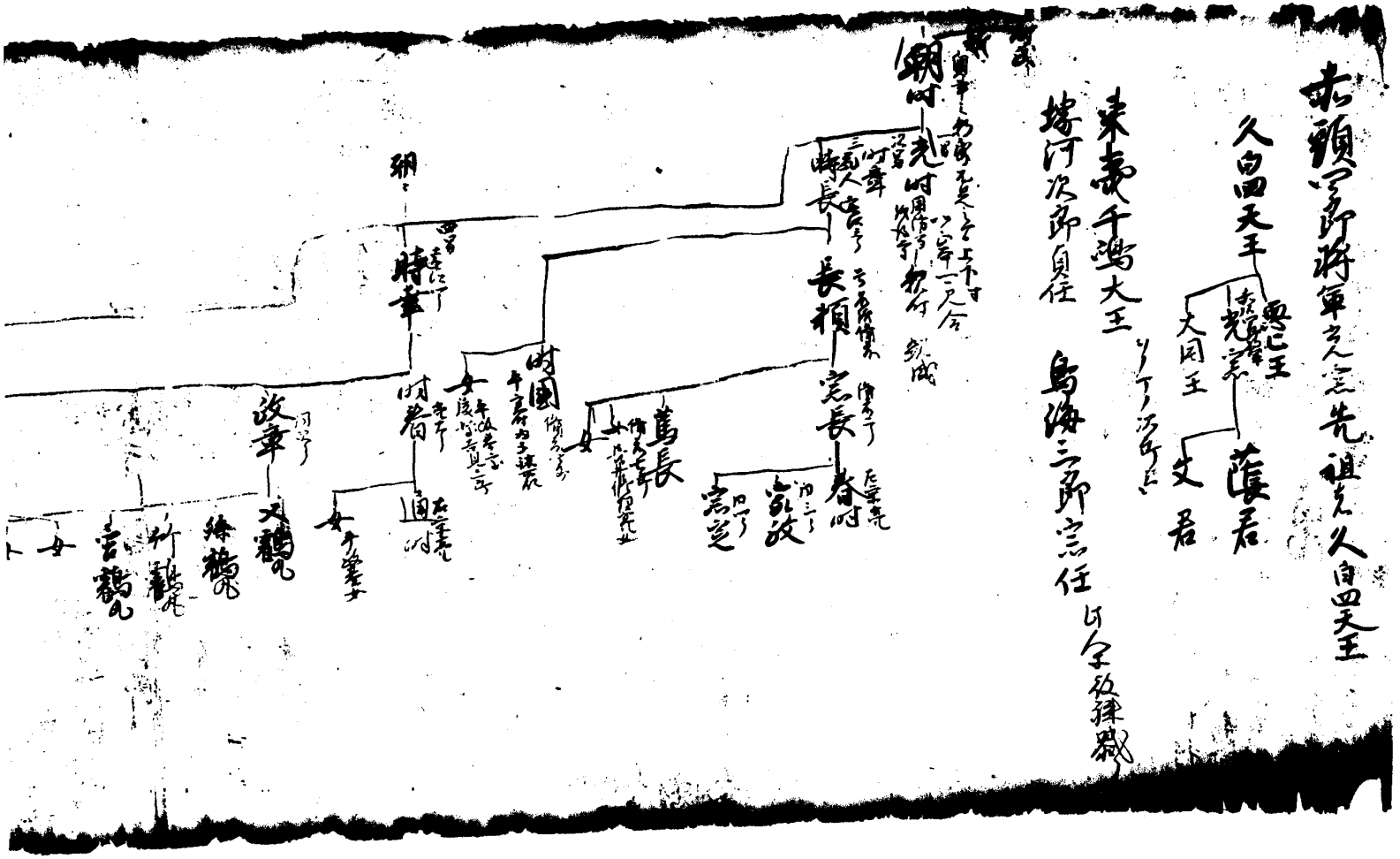
然しそれらと対比しても、この系図「五番」（入来院家所蔵）ウラのみに見える者がかなりあると気付く。

（補注2）この二〇〇一年は、史料編纂所にとって史料集刊行百周年に当たり、これに因んで上野の東京国立博物館で特別展「時を超えて語るもの―史料と美術の名宝―」が開催された（二〇〇一年一二月～二〇〇二年一月。図録あり）。そこで武家文書の代表として、島津家文書とともに入来院家文書も陳列されていた。これに因んで、また東京大学出版会の『UP』三五〇号（二〇〇一年一二月）に近藤成一「英訳された古文書―入来院家文書」が掲載されている。

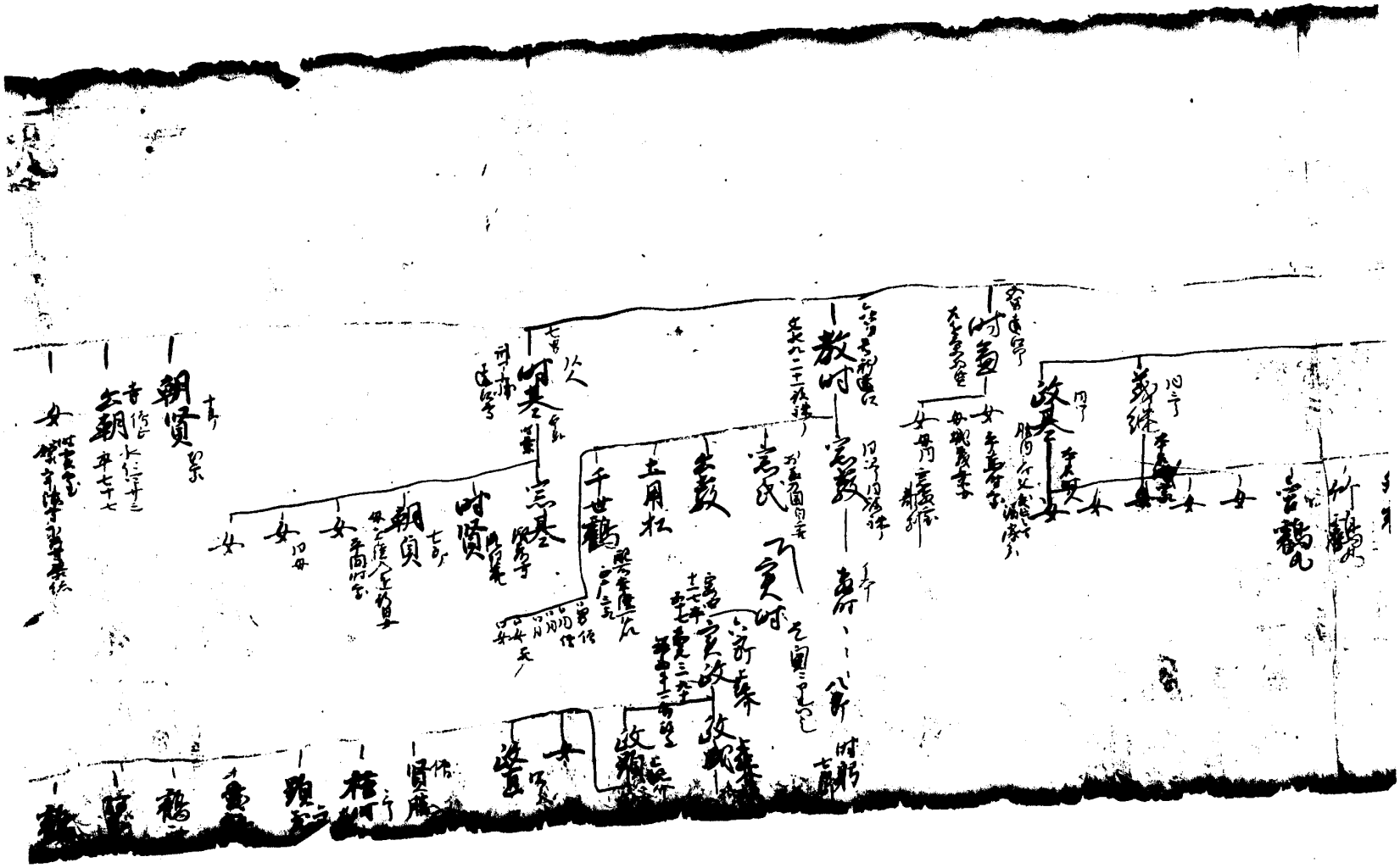
［付記］入来院家所蔵の系図「弐番」②と「四番」との分離（剥離）時期は、既述のように『御文書改帳』（宝永四年、一七〇七）以前だといえる。それに対して、系図「五番」の焼損時期は『御文書改帳』以後ではなかろうか。もし以前ならば、『改帳』に何らかその旨が記されるであろう。化学的分析でもすれば、焼損の時期はより明確になるかもしれない。なお系図「五番」の最下部は、焼損以前、さらに宝徳四年（一四五二）書写（系図「弐番」②―「四番」の作成）以前に、既に若干摩滅していたと思える。



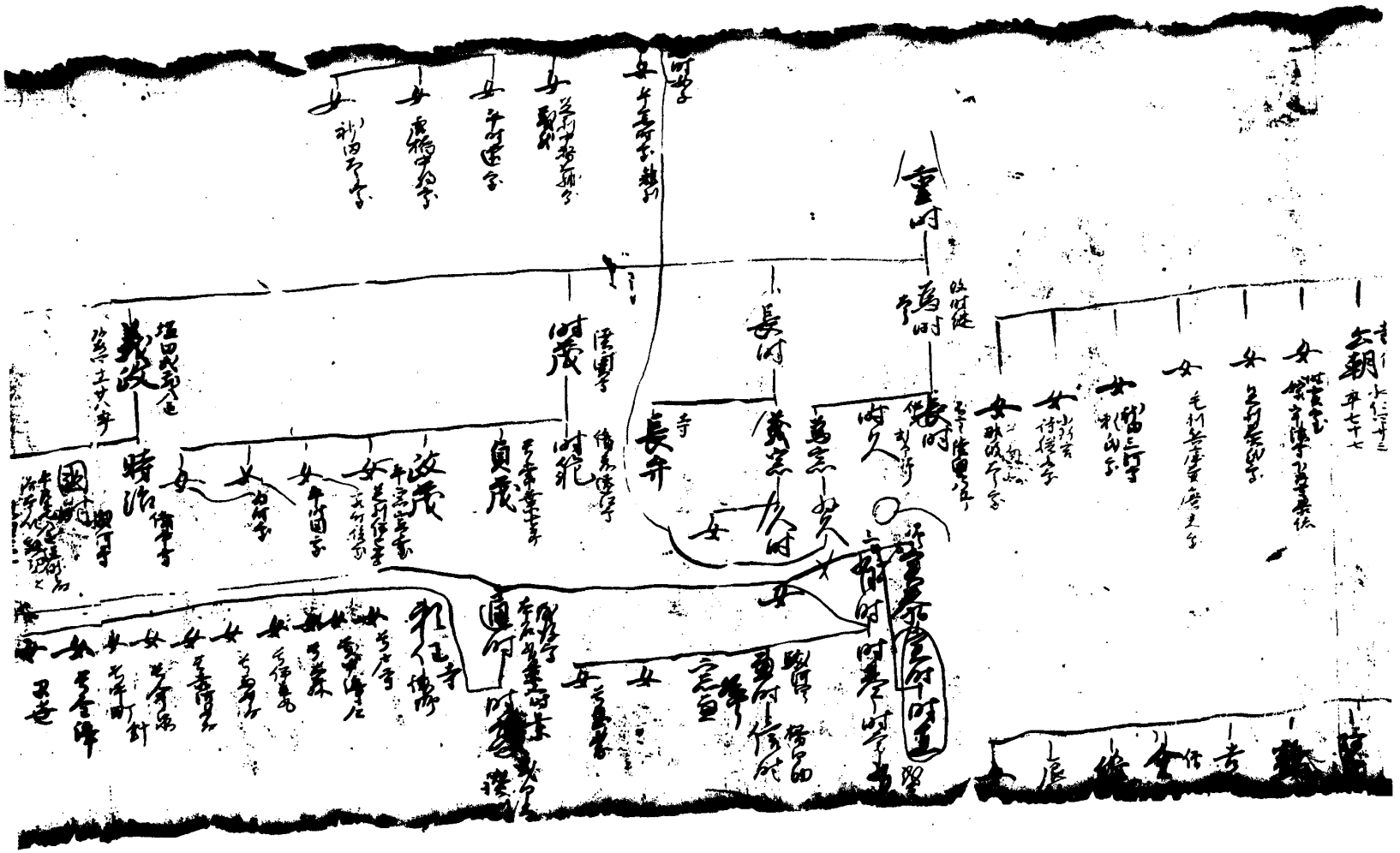
[図１] 系図「五番」オモテの末尾部分



［図２］系図「五番」ウラの冒頭部分



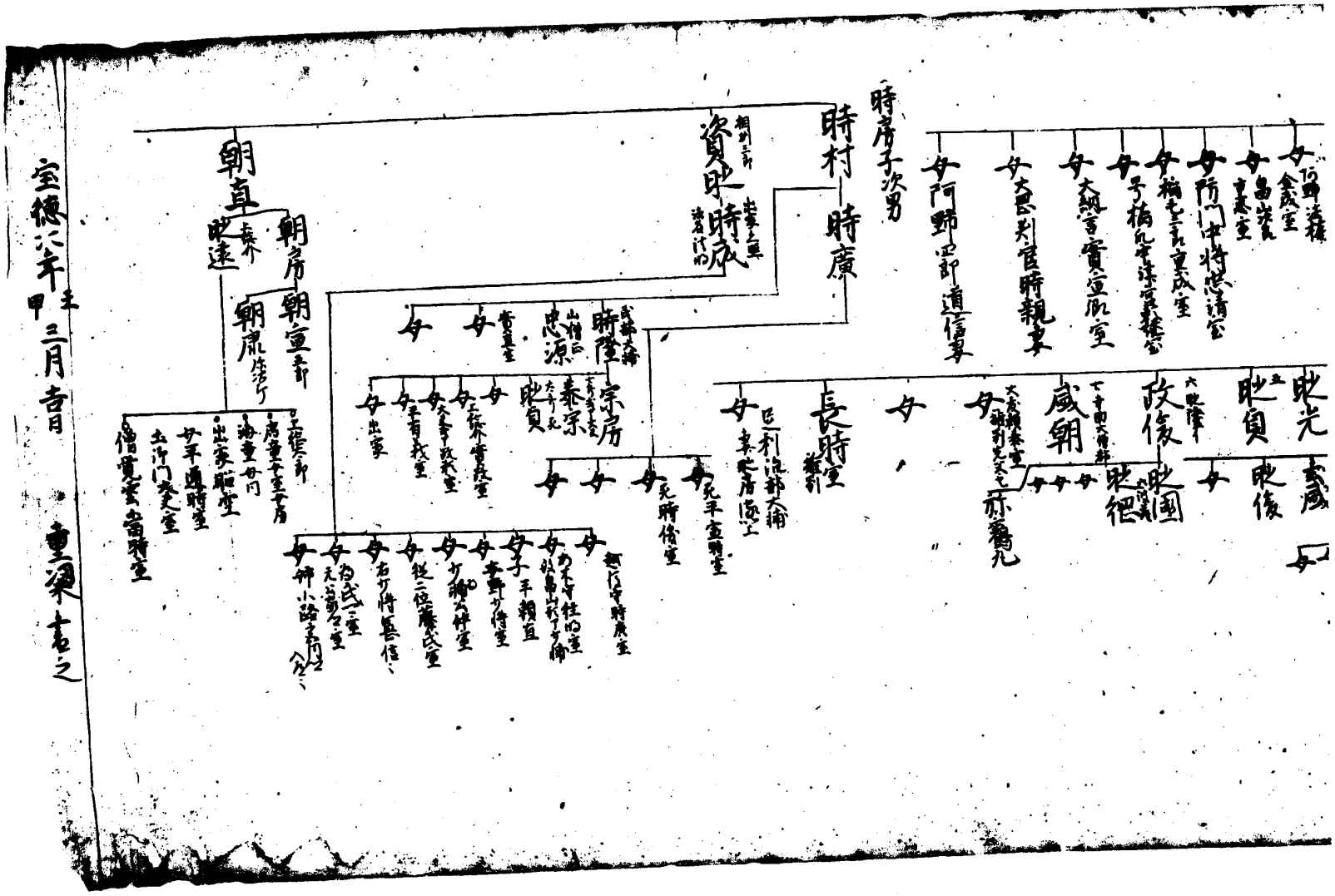
[図3] 系図「五番」ウラ、下段に系図ⓐあり



［図 4］系図「五番」ウラ、下段に系図ⓑあり

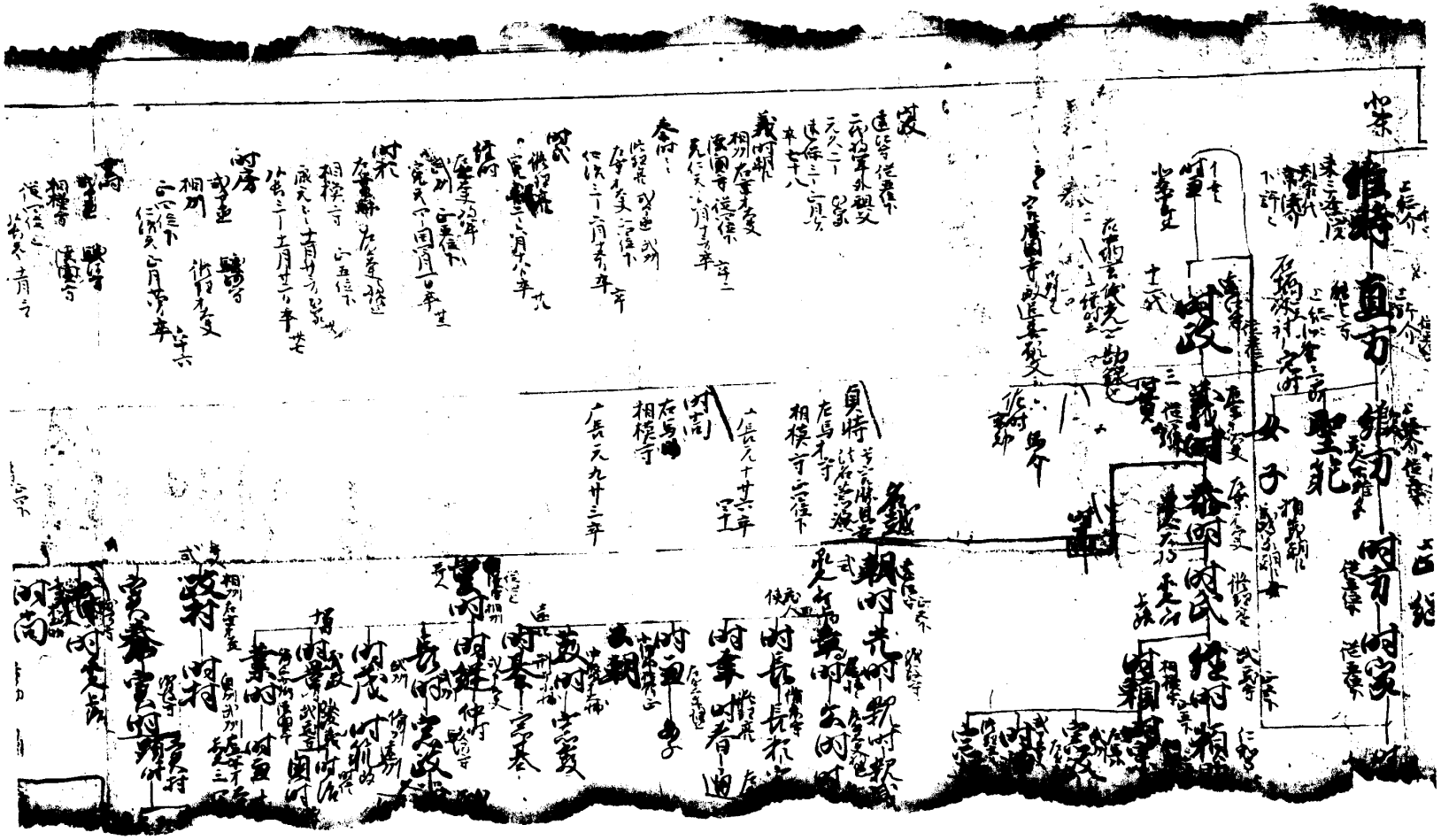


[図5] 系図「五番」ウラの末尾部分



［図６］系図「四番」の末尾部分

（奥書の１行前に見える縦線は、紙継目ではなく、単なるシワである。）



［図７］系図「五番」オモテ、北条氏の前半部分